

政治小説
雪
中
梅
(下編)

末廣鐵腸居士著

政治小説
雪
中
梅
下編

東京 博文堂藏版

(初版本願)

雪中梅序

身を百億に現して、臨時化導の方便を施す
是れ善薩乗の所説に非ずや今日吾人の期す
る所は此の民を化導して國家の福利を増進
するに在り其職任の廣大重要な豈に當
に佛徒の衆生濟度のみならんや故に今の
政治家たる者は固より身を千萬億に變現し
て臨時化導の方便を施さざる可らざる也然
らずんば何を以てか三千年來昏々睡眠する
三千餘萬の蒼生を擡起して富強文明の新
世界に入らしむることを得ん此故に政治家

は亦新聞記者たらざる可らず亦道德家たら
ざる可らず亦學者著述家事業家たらざる
可らず時に身を小説家に現し錦心繡腸を
銀花水月の幻境を發露し以て大聲をして
里耳に入り易からしむるが如きは今日我國
の政治家たる者の最急方便なりとす末廣君
鐵腸早く茲に見る所あり且には身を新聞
記者に現して侃々諤々時弊を痛論し夕に
は身を小説家に現して世人をして拍案快
を呼ぶの際知らず識らず政界の妙味を嘗め
しめんと欲す其意を國家人民に用ゆること
寔に深しと云ふべし
同く小説なり之を分てば Novel Romance
の二大品類と爲る Novel は何ぞ人情を基
本とし新奇喜ぶべきの言行を構造して之を
潤飾し而も荒誕不經に流れざる者則ち
是れ也 Romance とは何ぞ忽ちにして驚
天動地の奇談忽ちにして拔山倒河の言行巧
みに之を連續して敢て荒誕不經に流るゝ
を忌まざる者則ち是れなり此書の如きは

Novel の品類に屬すべき者にして意匠俊
拔指餘奇警固より尋常小説家の企て及ぶ
所に非ずと雖ども一言一行悉く根柢を世
間實在の事態に占め絶て空漠荒唐に涉る
者なし蓋し政治小説中の最も時事に適切な
る者乎

邦人未だ小説の何者たるを知らず動もすれ
ば之を視て婦女子消間の玩具にして士君
子の手にだも觸るべき所に非ずと爲す焉
ぞ知らん小説(今安富の譯語を得ざるが故
暫く小説二字を以て Novel に充つ以下單
に小説と記する者は是なりと知るべし)は
近世文學上の一大發明にして其文化を贊育
せること實に少小ならざるを古の歴史は
荒誕怪奇にして編者の想像に成れる者多
しと雖ども尙ほ是れ歴史にして小説に非ず
支那の古に飛燕外傳穆天子傳等あれども
復た一部の小説と稱すべき者なきに非ずや
希臘羅馬波耳西亞拉比亞皆な怪譚奇話
に富めり而して古昔復た一部の小説と稱す
べき者なかりしに非ずや其の之れあるは近
世に創まれり試に英國を以て之を例せん
始めて小説の名に恥ぢざる者を生せるは十
七世紀の初めに在り始めて當世現存の事實

と人物とを敷衍して小説を作れるは同時紀の史に在り始めて理論上の主義を小説中に寓せるは今世紀の初めに在り之に尋で政治小説あり又之に尋で科學小説あり將に蘊有を網羅して遺さざらんとするは是れ近時小説の進歩に非ずや小説決して輕視すべきに非ざる也

小説の品類此の如く其れ多しと雖ども概して之を論ずるに虚に過る者は怪譚と爲り實に過る者は歴史と爲り傳記と爲り學藝と爲る巧みに虚實を湊合し人をして開卷手を釋くこと能はざらしめ而も娯樂の間覺えず益を得せしむる者にして始て有用の小説と云ふべき乎書して以て鐵腸學兄に質し併せて江湖博雅の君子に問ふ

明治十九年十一月 學堂居士 尾崎行雄撰

雲中梅下編目錄

- 第一回 天幕未熟曉窓讀告別書
- 第二回 醉步傳屏訪隣方房奕藝
- 第三回 臨陣場攻革陣地勝敗概
- 第四回 聞新開評說禍機心術
- 第五回 出遺書老翁遺新婦
- 小人設筵將臨談書

- 第六回 一紙新聞巧離間佳人オキ
- 第七回 忠婢懷心事實別散疑感
- 第八回 逐鹿學永羽將立來風

第一回

天幕未熟曉窓讀告別書
人事無常山店逢相識客

國野基は箱根湯本の福住樓にて圖らず一人の少女に出逢ひ風呂場にて拾ひし短冊の手跡よりし己が是れまで尋ねて居たりし恩人なるを知りしが其の容貌と云ひ氣象と云ひ世間稀なる婦人なれば獨り熟し思ふ様「我れ男子と生れて社會の爲めに盡力する志を立て世間の婦人は眼高に入らぬがアノ様な才色兼備の女の爲めには鐵石の心も砕けねばならん左れども先刻の話の迹先を考へて見れば一家の主人である上に兼て契約した人を探ねて居る様子デヤそして多少資財もあつて中等以上の家に生れたものに違ひ無いが此の身は色々な不幸が續き四方に流落して身を立てることが出来ず今では下宿屋の二階に櫛籠リヤット翻譯で糊口をする程だからトテモ近い内に一家を持つことは出来まい左すれば他口功業を成就してもあの女は早や綠葉成陰子澁枝と云ふ様になるに相違ない誠に残念なことぢや左れども同志の少い今日にあつて

巾幗中に一の知己を得たのは誠に愉快のことである彼の婦人は何處の出生であるか些し心に掛ることがあるが先刻は外の話に紛れて聴て見る間が無かつた當分此の樓に逗留する様子だから父徐々話することも出来るであらうト獨り燈に對して種々の事を考へ十二時過に至り始めて枕に就き一寝入りして眼を開けば旭日窓櫺を射て昨夜投宿せし旅客は概ね出立せしと見え樓上樓下とも寂寥として獨り早川の溪聲のみ洶湧として枕に響けり國野は欠伸をしながらか枕元に在る煙管を把つて煙草盆を引寄せ續けて二三服煙を吹き居たる内に樓嬪は一寸唐紙を明けて内の様子を窺ひ一旦那今朝は珍らしくよく御寝ましたネモウお起になりますなら御床を上げませうか國朝日がさして大分熱くなつて來たがモウ何時かネ下女今八時の時計が鳴りました國夫れでは大變な朝寢だつた下女先刻下座敷の御女中が御出立になりましたが……と聞いて國野は吃驚し蒲團を卷つて側へ突き退け國ナアニ彼の女が立出たの東京へ歸つて仕舞たか下女イ、エ木質へ御上りになつたのです何だか旦那に御用がある御様子でしたから度々私が茲へ參つて見ましたが餘り能く御寢て入らつしやるから御起し申しませ

んでした。國夫は残念なことをした無理にでも起してくれ、ば善いに出立掛に何か傳言はなかつたか。下女旦那のお目が覺め次第差上げて呉れる様にとて之れをお頼みになりました。ト帶の間より一通の手紙を出だすを國野は受け取り急ぎ封押し切つて之れを讀めば其の文に曰く昨日ははからずお日も致しうれしく存じ參らせ候尚ほ逗留中はゆる／＼御話しを承はりいろ／＼お頼み申上げ度ことも御座候處叔母候急に木賀へ參り候とて昨晩じに駕籠を申付置今朝は日の出ぬ内に、出立いたし候様差急がせ候まゝ御暇乞も不申上誠に失禮仕候是非歸りには此の内にて御日も可仕候得共木賀も至て靜の土地の由に承はり候間御前様も御都合出水候得者同處へ御上り被成候而は如何に御座候哉御勤め申上げ候取急ぎ候まゝ何事も書き遣し御日もこの時に讀り申候あら

月日 國野先生 春

國野は再三手紙を繰り返し何故其の叔母が急い

で此の地を出立したのだらうか不思議なことヂヤと思ひ、好く考へて居たりしが、あつて心にうなづき「お初とんアノ女の件、婆さんはどんな風の人かネ、下女何だか意地の悪い様な御方でして御女中も大層お氣をなさつて御出での様に見てますワ」と聞いて國野は笑を含み「ハア、さうかそれで分つたお初とんお世話だ、が下へ往く序に御亭主にさう云つて宿帳を借りて来て下さい、ドレ淨水を造つて来よう、と手巾を携へて風呂場へ赴けば下女は其の間に寢床を上げ室内を掃ひ程なく宿帳を持ち來れば國野は帳面の跡の方より繰り返して之を視るに止宿の客は毎夜數十人なるが筆太に正何位何某同じく従者何人ト書きしは府下の貴紳にやあらん華族には家法の隨從あり官員家商は妻子と下女を召連れ同行十餘人、とあるは富士詣か大山參りなり單身の書生あれば俄か出來の夫婦あり四五枚目に東京京橋區築地三丁目藤井タカ五十一、年三ヶ月同くハル十八年五月と細く書き記せり國野は心の内にて「是れだ／＼シテ本籍は長野縣平民とあるネ名前が春と云ふ上に音聲に何處か西國訛りがある様だから兼て氣に掛けて居る女ではあるまいかと思つたが氏が藤井で長野縣なら矢張り別人だと獨り語りつゝ手

帳を出だし町名番地を書き留めて下女に向ひ「私は是れまで上の方へ登つたことがないが爰から木賀まで甲數は何程あるか、下女一里半餘りと聞て居ります、國さうか止宿帳はモウよろしいから下へ持つて行つて御飯を出して下さい」國野は已に一週間近くも湯本に滞留し少しく退屈したれば徐々外の場所へ轉ぜんと思ひ居たりしにぞかた／＼意中の人の跡を逐ひ急ぎ木賀に登らんと思ひ立ちしに此の日の夕方より小雨降出だして殊の外冷氣を催し少しく感冒せし様に覺ゆれば心ならずも出立を見合せたり國野の爲めには久しく耳に慣れし谷川の水聲も何となく物寂しき様に聞え夜々燈下の夢は白雲を追うて木賀に飛びしなるべし四五日を経る内に病氣も全快したれば宿の主人に頼んで人足一人を雇ひ之れに革手提と毛巾包を擔はせて案内者となし已れは浴衣の上にヘコ帯を結め革巾を穿ちて一本の蝙蝠傘を携へ曉方の清涼に乘じて福住樓を立ち出でたり湯本より早川の河流に沿ひ五町許り登りて塔の澤に達す此處も一の浴場に許多の浴槽あり此處を行き過ぐれば七曲と呼ぶ峻坂あり愈上登れば山高くして谷深く桐木鬱蒼として處々に飛瀑あり水聲鏗々として溪間に鳴り風景イト幽邃なり一里餘にして大



(畫面本版初)

平臺に出れば一の料落にして許多の人家あり湯本近傍の諸山は脚下に出没し遠く數里の外に相模洋を望む海色鏡の如く白帆の往來歴々として數ふべし路傍大樹の下に一の茶店あり店前に井欄を据ゑ飛泉濺々として其の間に噴出する里人之を姫の水と名け箱根山中第一の清泉にて山坂を上下するもの多く此の處に休憩す銅者會て湯本を發し宮の下に赴く途中の五古一首あり左に錄す

曉雲籠二溪水。紅日未出山。獨乘二早涼爽。短筇試二躋攀。逶迤踰二丘阜。人家傍二碧灣。炊烟幾縷白。柴荆門倚闌。一徑入二山細。行步漸險艱。羊腸八九折。崕呀石露拳。懸巖何峭峻。縋裂如二猢猻。巖腹貯二乳水。逢レ隨則潄々。或瀉爲二飛瀑。樹梢素練懸。或瀉爲二碧潭。微風起二清漣。脚下閣二泉響。鏗鏘鳴二玉環。高低又屈曲。路出二碧林間。松杉皆合抱。鬱蒼不見二天。瘦藤長蛇動。古木怪獸囀。竹外黃鸝囀。嬌喉自綿蠻。山菜已成熟。離々紅紫斑。枝高無二山摘。口渴流二饒涎。林盡逢二平曠。我意殊安閑。回顧渺茫外。海色碧成二變。飛鴻影滅沒。白帆入二蒼烟。乞火就二野店。松下屋一綫。獨究二溪山勝。登臨興未二闌。思我在二家日。衰羸良可二憐。出門僅數步。喘息已蹣跚。溫泉有二靈效。一澡醫二病孱。頓覺兩脚輕。健步逐二飛鶯。行與二猿狙伴。不レ辭山履穿。國野は案内者と四方山の話をしながら此の店前に來りしが遠き山坂を歩み非常に喉の乾くにぞ拘にて飛泉を酌み幾度となく口を噉ぎ帽子を脱いで縁側に腰を掛け手巾を出だして面の汗を拭ひ十分許りも休息し木賀までの路程を問へば最早や二十町計りと云ふことなれば何となく心

も勇み「ドレ熱くらぬ内に行かうかと云つゝ、錢義より銅貨二三錢取出だして茶盆の上に置き身を起さんとせしが忽ち「エイサア」ト云ふ聲が聞え一の山駕籠を此の店前に擔ぎ入れたる駕籠の中にあるは若き女なるが國野と顔見合せ「オオ貴君はト言ひながら立出づるは別人ならずお春なり手拭を以て衣袋の上の塵を拂ひながら國野の側に腰を掛けければ國野は急がしく「マア貴女は何處へ入らつしやいますか 登ハイ急に東京へ歸らねばならぬ様になりました 貴君も木賀へお出でになりましたやかと今日まで御待ち申して居りましたに爰で御別れ申しますのは誠に御名残り惜しう御座います 國ハテ夫れは至急のことですな 先日は御出立掛に御手紙を下さつたので直にお後から參らうと思つて居ましたが天氣の悪い上に少々風邪の氣味合でしたから今日まで湯本に居りましたがマア貴女は何故至急に御歸京になるので御座いますかネと問ひ掛けられてお春は近傍を見顧ししながら「今朝東京から叔父が急病と申すことで電報が掛りましたが氣遣ふ程の事はあるまいと思ひますけれども病氣と聞きましては湯治をして居る譯にも參りませず急いで歸ることになりましたマア貴君は何時頃御歸京になりませうネ 國 模様によ

と友達が尋ねて来るかも知れませんが、多分二週間は逗留になりませう。叔母さんはどうなさいました。春、下女と一緒に後から参る筈で御座います。國叔母さんが附てお出ならば途中も御安心でせう。ト云ふを聞いてお春は悔しと思へる。額付にて「イ、エ叔母さへ居ませねば徐々貴君と御話しをすることも出来ませう。此様に急いで歸るにも及びませうに残念なことをしました。國野さん御歸京の上は……ト云ふ内に又々二挺の山籠籠は此處へ來掛り前の籠籠に乗れるはお春の叔母にてイト憎氣のある老婆なるがお春が國野と差向ひにて休み居るを見認め苦々しき額付にて此方を睨みながら小聲にて何か奥丁に隔けば奥丁は點頭いてニツコと笑ひ此の時まで樹の蔭にて煙草を吹き居たるお春の奥丁に聲を掛け「オイ若い衆急ぎたてヨ酒代が出たぞ早く行かねえかト云へば叔母も籠籠の中より牛身を出し皺がれ聲にて「お春やぐづぐずすると途中で日が暮るヨと叫び立てられお春は氣の進まぬ額付にて立ち上り右の手にて簪のホツレを撫で乍ら一寸櫛者に氣を付け國野に目禮し小聲にて「孰れ御近い内にと云ひながら徐かに籠籠に乗り移れば奥丁は竹節を力にして聲を合せ二挺の籠籠の跡に従ひエツサ／＼飛ぶが如く走り

去れば國野はツト立ち上り林樹の蔭に見え隠れとなるを目た／＼きもせず名残り惜氣に見送り居たるが誰とも知れず背後より肩を打ち「國野君何をボンヤリして居るのだと聲を掛けられ後を振り向いて「國、オヤ吃驚した誰れかと思へば武田君かマア君は能く出掛けて來たネ

第二回

醉歩倒屏防障房奕奕
團坐傳杯談地方形勢

懸巖相對して屏風を立つるが如く其の深き幾百尋なるを知らず湖底樹木鬱蒼として其の下に水聲の洶湧たるを聞く一逕屈曲して巖角を繞り兩岸の狹き處に一の危橋を架し道を前山に通ず橋下水色藍の如く側らの巖石より熱泉を噴出し硫氣飛騰して煙霧をなす里人乏れを太閤風呂と名く豐太閤小田原征伐の時湯槽を設けて此の地に浴せしと云ふ前面の峭壁上より數條の水簾を瀉下し瀟々として雷の吼るが如く又一匹の白練を曳くに異ならず仰げば高山突兀として巔上に陥落し來らんとし幾條の小飛瀑あり碧樹の間に隱見す是れ箱根底倉の景色なり巖下に軒を列べ許多の湯戸あり梅屋と云へるは層樓巍々として山に對し溪に臨み箱根山中にて二三を爭ふ大樓なるが今や昨年新築せし二階の一間には壁に山水の軸を掛け瓶中に百合の花を

挿み火鉢に鐵瓶を掛け其の側に炭斗茶鉢を置き二人の書生は今脱ぎしと覺しき衣裳を欄干にかけ浴衣の儘にて座蒲團の上に寝轉び一人の書生が「武田君善い風が来るナア此處は湯本から見ると大分涼しい様だソシテ景色も面白いではないか先刻姫の水の茶店で君に逢うたは實に意外であつた君は又どう云ふ都合で茲へ出掛けて來たのかネ武途中でも一寸話した通り出獄後伊勢へ歸つて見ると母の病氣と云ふは全く誤で實は僕を呼返して國へ置く積りの様子だから僕は太議論をオツ始めヤツト再び出京する都合になつたのサ最初は久し振に歸省をしたのだから一二月は逗留しようと思つたが國の書生は皆なん因循で一人も話せる奴がない僕の獄へ這入たのを聞て國事犯でも遣り掛つた様に思つて畏れて居るから面白くないやアないか國野君此の節地方にぐづ／＼して居る奴は駄目だソシテ警察でも僕の舉動を探索する様子だから猶のこと大言を吐き散してやつたト言ひ掛け今火斗に火を入れて持ち來りし下女を見て「オイ姉さん先刻吩咐て置た酒を早く持て來てお呉れ何をぐづ／＼して居るのだ」下女はニツコリ笑ひ「お待ち遠さま只今御看をこしらへて居ります武待遠いから催促をするのだ冷でもいゝから



(初版本画)

早く出して呉れいト云ふを國野押し止め「晝間に酒を飲むことは止めようぢやないか君の酒癖も通りのものが獄中に居た時の不自由を思へば少しは辛抱が出来さうなものだ武田は些と急き込みし顔付にて「大丈夫が酒を飲まぬと云ふことがあるものかソシテマア聞き給へ二三人昔の友達を引出して酒樓に登つた處が隣り座敷に郡役所の奴等が藝者を上げて騒いで居るから僕は不平でたまらず障子越しに罵詈雑言をしてやると

向うからも悪口を言ふから友達止めるのを突き除けて其の座敷へ飛び込み其邊に居る奴に拳固を喰はせ皿鉢を投げ付けて追散し其の夜は大醉で寝て仕舞たが……國野の寵姫には困るヨ社會に立つて事業を成さうと思ふものが酒で本心を失ふ様ではいけない些ト謹み給へ「武ナアニ養蠱の様な奴は噫き倒してやつたつて構ふものかダガ其の翌日になつて聞くと其の内に警察署の探偵なども居つて告訴すると云つて騒ぎ立てる様子でもあるし誰かが親爺へ其の事を話したと見えて散々小言を喰つたから残りの旅費丈を持つて内を飛び出したが其の前に君の東京から出した郵便が居いて箱根へ湯治に出掛けると云ふことだから東海道をぶら／＼遣て來て一昨日箱根の宿から蔭湯を通つて茲へ宿を取木賀宮下堂島まで一野々々尋ねて見ても君の居先が分らぬから屹度塔の澤か湯本だらうと思つて下り掛けた處であつた話の中に下女は大きな塗り盆の上に一瓶の酒と一皿の鯉の鱈焼を載せ杯洗に二ツの猪口を浮べて持ち來り二人の前に置き「下女お待ち遠さま一つ御酌を致しませう「吾手酌の方がいゝ置て往て呉れい此様小さい猪口では飲んだ様にないト云ひながら側らにあるコップを取つて満々と酒を注ぎ一息に飲み干

し舌を鳴らせば下女は驚いて武田の顔を眺め「旦那お代りを持つて参りませうか「武知れたこと一本位で足るものか國野君一杯どうだ「國野は笑ひ乍ら「日中は眞平だマア横になつて居て君の御手際を拜見しよう「武田は下女の梯子を下り行く後影を見ながら「アノ女は眞黒な面へベタ／＼白粉を附けて丸で妖怪の様だダガ茲の内は何事も淡泊でいゝぜ君は木賀へ行く積りであつたト云ふが木賀や宮の下は上等客が多いから君の様な錢のない男はハ、ハ、ハ、是れは失敬ゲ一ツ書生には此の内位が丁度いいぜ茶代が少い時は何ほ有名な國野先生でも厚遇氣遣はないと眞赤になり獨り得意に喋舌り國野の脇を枕にしてウツ／＼睡るを見て「オーイ先生因循だの一杯飲んかオヤ姉さん代りの酒を持て來たか是れは熱燗で有り難いト手に取て前後「コップ」に六七杯を傾けア、善い氣分になつたドレ小用に往て來ようト立ち上りしが已に十分の酔を催し頭重くして脚輕く踉蹌として倒れかゝり間の唐紙に突き當れば此の時まで隣り座敷には甲乙二名相對して碁を圍み輸贏を爭ふ眞最中なりしが忽ち唐紙外れて柵上に倒れ石子バラ／＼ト席上に散亂するにぞ兩人は不意に驚き飛立てば武田も踉蹌する足を踏み直し

目を見開き、口を拭ひ二人の顔をジロリと眺め「是れは失敬ト云へば一人は二十二三許りなる加強の男なるが眼を順らし拳を振り上げ失敬にも程がある勝ち掛つた基をだいなしにして仕舞たト云ふを聞いて武田も大層上げ「断りをするに聴かぬと云ふことがあるものか打つなら打つて見よト臂を捲つて飛び掛らんとす國野は隣席の騒動に目を覺し此の體を見て飛び起き「武田失敬をするなト後ろより抱き留むれば今一人の男も遶て少年の前に立ち塞がり「さう短氣を出すものではないト云ひつゝ國野と顔見合せ「オヤ貴君は國野先生では御座いませんかと云へば國野も「田村さん是れは御珍しう先づ此處へお出で下さいト先きに立つて己が座敷に案内すれば武田と一人の少年は俄かに喧嘩の勢が抜け兩人の後に付き溢々ながら座に就く抑も此の田村と云へば三十四五とも覺しく面色黒くして八の字髭を生し浴樓の貸し浴衣の上に小倉帯を緊めたり音聲少しく鼻に掛り其の言語風俗とも未だ都會の風に慣れぬと知られたる田國野先生一別來御堅勝で御目出たう先年殿下へ御遊歴の節は一通りならず御引立に預りました近頃は東京にて色々御盡力の由に承まつて居ましたが二三月前出京致し新聞紙にて

御災難の一件を承知いたして誠に驚愕しましたト云ひ乍ら武田を指し「此御方は先生の御連れで御座いますかと問はば武田はツカ／＼進み出で「ウン僕は武田猛でありませう「左様なれば國野先生と御一緒に御入獄なされた御方ですな「失策の枠組ですハ、ア此の壯士は田村さんの御同郷ですか「田イーエ福島縣の島田と云ふ御方です先年自由黨の盛んな時分に東京で交際をしましたたが四五年振に圖らず此の樓に落合つて御一處になりました「島田村君御話の間だが其處の御兩人は先日新聞で大評判だつた國野武田の二先生かな「田左様々々「島夫れとも知らず先刻は實に失敬をしましたト云へば武田は得意な顔付きにて「ハア、僕が踏躓いて唐紙を倒したから騒動が起つたのぢやが今になつて見れば其で大出来であつたと言ひながら前にある酒瓶を振て見て「どうだ御兩君御近附の爲めに此の「コップで一杯つつ飲まうぢやないか「國君は復た飲む積りか此の上過ぎると唐紙を蹴倒す計りでなく階子段から落ちるも知れんぜ「四人ハ、ハ、ハ、夫れより國野は下女を呼び新に酒肴を命じ四人一座となりて盃を廻らし座下地方の形勢などを談じ執れも微醉を催したり國野は盃を下に置き「先刻からのお話で

は田村君は相變らず縣會に御盡力の様子だが御縣下の議會は近頃どんな有様ですな「田イヤハヤお話にならぬことで御承知の通り前年は我々の同志を以て議會を組織し百事都合能く行き掛りましたが二三年跡より非常の干渉を受けて之に抵抗することが出来ず今では議員の多數が行政官のお財方となつて何様な議案が出ててもサツサと通過して仕舞ひ議會はあつても無い様なもので誠に歎息に堪へません「國野政黨の盛んにあつた御縣下が左様に手を離へす様になつたは意外千萬のことぢやが是れも所謂波瀾と申すもので一時の反動なれば致方もないが選舉人の多數は御同志に反對して御味方黨を賛成する様になつたのですか「田イヤハヤ地方官の處置に就ては反對を爲すものが多い一時に土木費の増加するには縣民も困却して居る様ですが何様人民は少しも選舉に注意しません上今日地方の組織にては郡長や戸長の干渉で随分投票を支配することが出来るに閉口します現に昨年議員半数の改選のときも私は一郡内を奔走して同志者の選舉される様に盡力しましたが選舉人の過半は馬耳東風で少しも感覺がなく戸長などが郡長の内意を受けて此の人が善からうと云ふと大方之に雷同して

投票をするから何共致し方が御座いません島田君などの御縣下は如何ですなと問はれて島田は目ジリを釣り上げ膝を立て直し荒ら／＼しき聲にて「イヤ御同様な事で縣會は大方行政官の奴隷となつて仕舞つて少しも頼みにならん議員の内て屈指と思ふものでも知事の御馳走になつて涙を流して難有がり都合よく郡吏か戸長を拜命すると總理大臣にでもなつた様に思ふ奴等だから話にはならぬ僕は局外に居つても不平で堪まらぬが何かして此の風潮を一變するとは出来ぬものか知らん些ト國野先生の御説を承まはりたものだ」國野は先刻より耳を傾けて二人の話を聞いて居たりしが如何にも落付きたる顔付にて「今日の府縣會の制度にては代議士には權利と名譽が少いから何分にも思ふ様に一地方の人物を議會に網羅することが出来ず十分の成績を見ることが困難なるのは是非もない次第デヤが今日各地方とも府縣會の無勢力なのは畢竟民間に政事思想の乏しく議會に向つて刺戟を與ふることのないから起つたことと思はれます代議政體に經驗なき人民なれば深く政事上に感覺のない無理はないが輿論の微弱なのは誠に歎息するに餘りあることと思はれます民間の政事思想が進歩して議會を刺戟する輿論が

強大にならねば如様な法律を設けたとて實際に利益を見ることが出来ずまいト云ふを遮り武田は憤然として「國野君は何時も老成巨擘事を云ふが今日府縣會の振はぬのは人民の罪ぢやアない其の規則の良くないからサ地租十圓以上を納めるもので無ければ議員になる事が出来ず議場で論議することを許すのは地方税の支出ばかりで會議の議決した事件でも知事の氣に入らぬと何時でも不認可と出掛けるから人民も議員も精神が入らず奮發氣のないのが當然ではないか此の眼目の改正を主張せば人民が不注意とか輿論が薄弱とか云ふは不都合千萬ぢや僕は何分にも君の説に同意する事が出来ぬト膝を叩いて論じかくれば國野は姑しと抑止め「ナルホド武田君の御説も尤も千萬で制度法律は重大の影響を人民の感情に及ぼすものである自由政治の下でなければ十分に人民の政事思想を養成することの出来ぬは勿論だから規則の改正が必要なのは言ふ迄も無いが之を應用する人民に知識氣力のない時は如何様に文面の立派な規則でも利益を國家に及ぼすことは大かからう今日地方官の容易に議會を左右するのは畢竟議會が孤立して輿論の聲援がない故ではあるまいか議會は多數人民の意見に従つ

て運動し若し地方官の政略が議會の見込みに反對すると人民から激烈の抵抗を受ける様になれば規則には何とあらうとも地方官は容易に特權を使用して議會を左右することが出来ぬから實際の慣例からして議會は漸次に權力が出來純粋の立法官となつて終には成文上の改正をも促す様になるに相違ない英國などで議會の發達したのは皆な此の實際の效力であつて成文上の改正から來たものではない若しも行政官の干渉で議員の多數を支配することが出來たり代議士の意見を拒絶しても人民が無感で居る様では幾ら規則を改正しても自由政治の實地に行はれる氣遣ひはあるまい尤も府縣會のことは僅に一地方の利害に限るから別に心配をする程のこともないが國會設立の後になつて地方の人民に政事思想の乏しい時は國會は孤立して聲援がないから勢力の強大な政府と對立して人民の權利幸福を保護することの出来ぬのは云ふ迄も無く議會も輿論の制裁を受けぬと自然に腐敗して國家の利益を妨害することがないとも言はれまい地方の有志家などは今から能く注意して人民の政事思想を引き起して有爲の人物を國會に出して強大の輿論を造り出だす様に盡力せねばならぬまいと云ふに島田は膝を進め

「國野先生の御説は能く分りましたが先生は地方の有様を歎息せられて自分の御住みなされる府下の事情にお氣が付かれんと見えませう東京に在つて學者とか政治家とかと云ふ人は學問もあり知識もあつて他日國會の議場に立つて政治上の改革を成就する積りであらうが我々から視れば何分にも無氣無力で大丈夫の精神がなく其の上銘々大天狗で他人を輕蔑するからドウしても結合が付かぬ今の様では國會が立つても強大な政黨を組織することが出来まいと思ひますが先生は如何お考へなされますか 國實に府下の形勢は僕も君と同感であります先年政黨組織の論が盛んに有つた時に妙な都合から自由黨と改進黨の二つに分れて大軋轢を始め雙方ともメチャ／＼になつたものだから今に有志者の間に猜疑心があつて協力一致の出来ぬのは困つたことぢや其の上にグラッドストーン氏はたんと無い様だが小バトネルや小チャンバレインが幾千人もあつて銘々に一方の隊長にならうと云ふ氣だから何分にも多數の才力經驗を集めて國會の準備を爲すことが出来ぬのは困つたものだ何程の才子學者でも憲法を始め内政外交理財軍務より教育警察衛生までも一々調査して改正の方案を立つことは逆も思ひも寄らぬ譯

だからドウしても多數の團結が必要である或る先輩に聞けば明治十四年の春であつたが東京に在る人々が小異を棄てて大同を取り一大黨派を組織する考へで上野の精養軒に會合して會議を開いたが種々の事情ありて目的を達せずトウ分裂して諸黨軋轢の端緒を開いたと云ふが畢竟時運の未だ熟せなんだ故で是非もない次第だ此の後國會準備の一大急務は府下に在る諸有志を結合して漸次に地方に聯絡を通ずる外はあるまい僕も不肖ながら社會の爲に十分に盡力する積りであるけれども府下に出てからまだ一年も立たず世間に名前を知られぬので志を達することが出来ぬ僕の社中の川岸は才氣もあつて中々老成家だから此度東京に歸つたら川岸を説き勸めて府下の聯合に盡力させたいものだト云ふを打消し武田は「カラ／＼」と笑ひ「國野君大れは駄目だぜ僕も前年から川岸とは一通りならず懇意にして見たが君杯とは性質が違ひ權謀が好きで人を欺くから信用が出来ぬ彼様な男と一緒に事を謀るのは危険だから僕は眞平お斷わりだ 國野君が君の様な考へで居るから一つも結合が出来ぬのぢや今の世の中に完全な人が澤山にあるものか才氣のあるものは品行があしく學問のあるものは經驗に乏しいと云ふ様

な工合で誰れも長處と短處とあるから備はるを一人に求むる時には天下の間に我が意にあたるものはあるまい僕も能く川岸の人物を知つて居るが其の心術品行の上から視れば随分缺點も澤山あるが人並に優れた才氣あつて他日頭を政事上に出す人と思ふから一ツの短處を擧げて之を棄てることはいない廣く同志を四方に求めようとすれば自分と臭味を同うするもの計りもなく婦人なり子供なり身を屈して下らねばならぬ自分獨りで功名を成す様な考では多數と共に運動を試むることは出来まいト泰然として説き諭せば如何にも細流を挾はざる河海の度量ありと粗暴過激の武田島田も深く感心し暫し話しは途切れたり稍あつて田村は國野に向ひ「婦人と云ふ御話しで思ひ出しましたが僕が先日木賀の鶴屋に参つたとき向ひ座敷に居つた十八九計りの女は漢文の無點本や六ヶしさうな洋書を読んで居りましたから權婢に聴て見たら東京の人だと云ふことですが今の若い婦人には随分學者があるから馬鹿にはなりません」ト云ふを聞き國野は姑し忘れし意中の人のことを思ひ出し覺えずハタと手を拍ち「ハ、ア夫れでは彼の女は洋學も出来ると見えるなアト叫べば田村は傍より「國野先生はアノ婦人と御知り合ひで御座いな

すかト問はれて國野は少し顔を赤め、國イヤナニ知る人と云ふ譯でもありませんが先日湯本で逢ひましたのがその婦人であらうと思ひますからと云ふに武田は何の氣も付かず「夫れでは今朝大平臺の上で休んで居た時に智籠の中で本を讀みながら下りて來た女だらう女が少々學問をする」と生意氣になるから困るぜ、國婦人の教育に就くのは社會の爲め最も必要ではないか武田君は洋書を讀む癖に時々議論に『エシヤチックプリンシプル』があるから可笑い、武外の女のこととはどうでも善いが此樓の奴等は鈍子の代りを持て來ぬから仕方が無いオイ姉さん酒だく田「モウ頂戴が出来ません、島私も大醉をしました、武酒に掛つては誰も僕に敵對の出來る人はない様だ

第三回

論劇場改革暗陳感慨
聞新聞評說竊惱心情

田「今朝は大層冷氣である様に思ひましたが到頭雨になつて來ました先生マ御覽なきい向うの山に雲が掛つて微かに其間から飛瀑の見えるのは何と善い景色では御座いませんかイヤ風が出たと見えて雲が此の樓へ飛んで來ます、國山中で雨に逢ふと運動も出來ず日の消しやうのないには閉口です今日は八月十日ですネ、武田と

島田とは昨日前橋へ着た筈ぢやが此の雨では定めて困るでせう、島田君が前橋で政談演說會を開くと云ふから僕も出掛けたいと思つたけれど身體の工合がまだ十分でないから武田を勸めて遣つたがアノ男は相應に漢學が出来る上に近年は英書を勉強して大分進歩をした様子でもあり物に熱心なのは中々感心だが前から大酒家であつて近來は世の中の事に不平を鳴らし兎角大醉をしては亂暴を働くには閉口します、能く忠告はして置きましたが演說會で粗暴の言を吐き又失策をせば善いと思ひます、田「イヤ其の氣遣ひは御座いますまい有志家でも虚飾の多い世の中に武田君の様な心口一致で淡泊の人は珍らしい御座います、國左様々々尤も人の氣象は地位に因つて變るもので今日罷將を生し四輪の馬車に乗つて老成家を氣取り民間に在るものを過激とか粗暴とか云ふ人も維新前國事に奔走した時は随分荒々しい舉動が多かつた様です武田なども志を得て上等社會に立つ日には氣象も自然に溫和になり何時までも今日の様にはあるまいが元來平等の自由とか貧富の平均とか云ふことが好きな男だから悪くすると激烈黨になるかも知れません、歐洲諸國でも下等人民の社會黨を組んで社會の秩序を紊亂するのは

皆んな志を世の中に得ぬ學者の煽動に因るのだから才力があり氣象のある者に不平を起させる程世の中に劍呑な事はありませんイヤ話の間に早や雲が晴れて窓に日が差して來た僕は茲へ來て早や一週間になるから大分退屈しました東京も先日からの雨で大分涼しくなつたらうから一兩日内に徐々出立をしようか知らん田「先生が御立ちになりますれば私も小川原まで御同行を願ひたいのですが、國「此二三日東京の暑さはどんなものか知らんト云ふ中樓婢の來るを見て「オイ姉さんくまだ新聞は來ないかね、下女「只今參りましたト一つの新聞の帶封をしたるを差出すを田村は手に取り押開いて標題の處へ目を注げ「昨七日正午十二時寒暖計八十八度「先生是れではまだ熱う御座います論説は何だ、工業論第一「一ツの事を幾度繰り返すか知らん此新聞紙も種切れと見える雜報も此の節では虎列刺騒で面白い種がないイヤ餘て風聞のあつた劇場改良のことが出て居ります「劇場改良の趣意書或る有名家の主唱によリ貴顯紳士等相談り大に演劇の陋習を改良せんとして其の同志を求められしに賛成の意を表する貴顯紳士新聞記者等夥多に及びたり云々」是れでは愈も發起者が出來たと見える芝居の舊習に

拘泥して居るのも、随分不都合だが、今日政事上や社會上に改良をせねばならぬものが澤山あるから何も紳士達が此様にとに駭き立つるにも及びさうもないものだ。國イヤ／＼さうでない演戯は小説と同様で如何にも重大の感覺を世人に與ふるものだから其改良は誠に必要なことと思ひます。歐洲などでは上等の芝居は其建物の壯大美麗なは勿論作者には相應に學問があつて事理を辨じ古今に通じて居るから脚色が巧にあつて能く時勢を穿ち俳優も教育を受けて上等社會に交際し自然に氣品が高く中々婦人の玩弄物になる様なものではないから劇場は上等社會の精神を養ふ場所になり各國の帝王や王妃までも公然と見物に出掛けられ我が邦の芝居の様なものでは無いと云ふことです我が邦の演劇は何分にも進歩が遅く近來新富層などでは頻りに西洋風を模倣する様だけれど止だ表向ばかりの改良で其の脚色の精神は矢張り二十年前武斷政治の時に出来たものと大同小異である自由幸福の氣象は少しも舞臺の上に現はれず士族の兩刀が巡查の『サーベル』と爲り拷問の場が警察者の留置所と爲る位では新らしき教育を受けた人を感心させることは出来まい是れも畢竟は作者に學問がなく東洋古來の風習を善いものと思

ひ込んで居る上に見物人にも矢張り封建時代の頑物が多いから仕方ない役者とても同じこととで中等以下の無見識の奴等は論ずるまでもないことで大立物の内でも家柄で地位を保つて居るのが多く上手と云へば成田屋とか音羽屋とかに極つて仕舞た様なのは不思議なことぢやないか今日でも兎角門閥の弊習が除かぬものだから善い親方の弟子にならねば御注進や馬の脚まで輒が利かず昇進も遅ければ善い役割に當らぬので藝のあつて氣象のある奴は不平を起して引込んで仕舞ふから面白い芝居が出来ぬ筈ぢや一日も早く脚色や役者の風儀を改良せねば見物人に満足と與へ外國人にも日本の演劇は妙ぢやと云はすことは出来まい思御説を聞いて見れば劇場の改良も太だ必要な様ですから私も贊成者の一人になりませうダガ一番大切なのは其の脚色です世の中が段々開けて來ると忠臣蔵や伊賀越のやうな趣向では面白くなく西洋風を真似てもシイザア奇談や佛國革命の傳記なども餘りゾツトせぬから新狂言は如何な工合に造り立てたら今日の人氣に合ひませうかなと問はれて國野は面に笑を含み一僕には兼て一ツの考案があります紀元前何百年とかに希臘に一の王國があつて其の王は賢明の聞えある人で

すから『アゼン』や『スバルタ』の風を學んで國民會議を開いたのです當時國中に政府黨と國民黨の二ツがあつて國民黨は次第に勢力を増し政府黨も些少持て餘し兼ねる様になつて來たものだから宰相は内閣會議を開き二十年も維持した政權を國民黨に渡すのは遺憾の様なれど古語にも之れを取らんと欲すれば先づ之れを與へよと云ふこともあり國民黨には一時人望があれば政事上の經驗に乏しいから連も十分に内閣を組織することは出来まい一度之に地位を譲つて其の爲す所を見るが上策ならんとて衆議一決し一回辭表を出だし國民黨の内閣になりましたが果して新内閣には人物が乏しく何事も纏りが付かず再び政府黨の勢力を得る様になり新陳交代の間に制度法律も大に改良が出来國民黨も最初の失敗に懲りて自ら實力を養ひ遂に政黨政治の端緒を開き一國次第に繁昌して人民は盡くと國王の寶祚萬歳を祝するト云ふ筋書ですが此の趣工はドウですト云へば田村は覺えず膝を打ち「ナールホドそれは面白い御趣向だ然し下手な作者ではさう旨く筋を立てて仕組みを付けることが出来ませう私の考へには其の國民會議には名題下の役者が澤山出掛けて來て何か騒々しい所作事がありトゞの詰り『サーベル』

を帯びた警察官が議場を取り囲み威力を以て
議書を解散して数人の議員を拘留すると云ふ様
な筋書になりはしまいかと思ひます 國此の十
九世紀の末に百年前歐洲諸國に流行した様な
芝居を始めると云ふことがあるものかダガ外
國人に觀せて笑はれぬ様にするには作者は勿論
舞臺に上る者も餘程注意をせねばなりません
田飛んだ活劇の話になりかゝりました ハハ
ハハハと述は兩人とも大笑となりたり國野
は欄干に掛けたる手拭ひを取り「大分暑うなつ
て来たドレ風呂へ入つて來うかト云ひつゝト
ン梯子段を下つて風呂場に至り衣裳を脱いで
湯桶の中に入りしが兩人の書生らしき男が今人
浴を畢りしと見え板間にて一人は濡れ手拭にて
體を拭き一人は「ガラス」鏡に向ひ櫛にて髪を
分け乍ら「サウ夫れから其の女はドウしたネ
△随分別品の上に學問も出来るがドウモ品行
が悪うて是れまで幾たび新聞に出されたか知れ
んが先日モ箱根へ湯治に來て居る内に情夫を
拵へて妙な騒動をやらかし旨く連れの婆を欺か
して東京へ歸つたが此の節も色々もめて居るさ
うデヤ其の新聞の書き方が何んでも委しい事實
を搜つたものに違ひ無いと思ふヨ △ソレは何
處の女かネ □ウン築地邊とある計りで町名

は書いて無いが君と此間木賀へ往つた時に逢
うた女かも知れんぜ △ソーサ随分彼の女は別
品だつたネ御先へ失敬食事が済んだら僕の處
へ話しに來給へと戸を叩いて前後に出で往きた
り國野は風呂の中に二人の話しを聞き心の中
で「築地邊の女で箱根へ來たと云ふからはア
ノお春と云ふ娘のことでは無いかしらん夫れで
も學問があつて發明なアノ女に限つては狼り
がましいことのある筈は無いイヤ／＼人は見掛
けに寄らんものであるからドウかも知れん今も
書生が木賀で逢うた女であらうと云うたがシテ
見ると愈よ夫れに違ひ無い夫れでは此節新聞紙
では迹形も無い事を書いて人に迷惑を掛けるこ
とがあるからウカと信用は出來まい若し此身と
話して居つたのを誰れぞが聞き傳へて構造した
のであるまいか夫れなら實に迷惑千萬なこと
であるから辯解をして遣らねばなるまいそれでも
色々騒動があつたと云へば事實が違ふ様デヤが
ドウモ何んだか氣に掛るから一日も早く東京へ
歸つて様子を聞き合して見たいものデヤと心は
ムヤ／＼として闇に迷ふ心地がすれば風呂場に
ある内にも氣が急かるれば其の儘飛び出し衣裳
を着けて二階へ上り縁側に出でて空を眺め「田
村さん愈よ大氣になつた様です今から出立し

ませうぢやないか 田餘り至急ですな明日で
も悪いぢやア御座いせんか 國考へて見れば
東京に色々用事もある上に明日になると又熱
くなるかも知れん雨後が却つて涼しくつて宜し
いト云ひつゝ草提箱を開いて讀み掛けの畫物な
どを取り月付けながらパチ／＼と手を拍ち一姉
さん姉さん 櫻「何の御用で御座います 國エ
／＼なんだつたかネア／＼さう／＼一昨日頼んだ洗
濯物は出來たらうネ今から立つから勘定を持て
來て下さい 櫻「マア悪いぢやア御座いせん
か明日になさいませ 國「イヤ／＼急に用事が
出來たから徐々しては居られぬ

第四回

讀神史少女飲眞婦
出遣書老翁強新婚

六疊敷の小座敷に廻り縁があつて軒には幾つと
もなく風鈴を吊し庭前の小き池には金魚が波
に浮び建仁寺垣に牽牛花を這はせて飛石の上に
盆栽を二ツ三ツ列べたるは如何にも風流の棲居
と知られたり違ひ欄には帙に入りし書物と四五
巻の洋書を列べ側らに大きな書筒ありて表
に湖月抄と書せり年の頃十八九計りの婦人が洗
ひ髪には本薩摩の單物に黒縹子と博多の腹合
せの帯の上に淺黄縮緬の帶上を締め机に廻りて
西洋の小説を讀みながら口の内に「何處の國

でも女の情と云ふものは同じものと見える此のミツセスマレーの情人に別れて色々辛苦をする處を讀むと涙がこぼれる様ちやダガ此の身は兩親に別れ尋ねる人は行方が知れず是程不運なものはあるまい其の上に叔父さんと云ふもホンの名ばかりで親切な様でも内心が分らず何處か怕しいところがある様ちやソシテ春からは色々と言ひこしらへて預け金の勘定も見せては下さらずおツ母さんの御遺言があつて深谷さんの消息を待つて居ると云ふことも承知でありながら此の節になつて急に亭主を持と度々異見をなさるのは不審でならぬ何か御父さんの御生前にお書きなされたものがあると云ひ乍ら今日まで其の書面を見せて下されぬのは如何云ふ譯であるか知らん艱難は何人あつても女ばかりで仕方がないアノ發明で親切らしい御方が此の土地に居らるゝならお松に頼んで御日に掛り何もかも打ち明けて御相談をして見たいものデヤに今の様子では當分お逢ひ申すことは出来まいデモ心細いことちやト讀み掛けし書物を下に置き傍の間より紅染の手巾を出だし涙を拭ふ折りから下女は縁側に手をつき「お寛さま御茶を入れて参りました貴女も此頃は築地の學校へもお通ひなされませず一間にばかりお立籠りて

御座いますからお氣が寒きますワ御天氣のイ、日には近邊でも御歩行遊しませんかアノネ只今叔父様が貴女のお氣分がよろしければ一寸御座敷までお出で下さる様にと仰しやいましたト聞いて少女は氣の進まぬ顔付にて「ア、又例の話しだらう一寸顔を拭くから銅盥へ湯を入れて来てソシテ叔父さんに只今参りますと申し上げてお呉れ下女一畏まりました御湯が冷めましたらうから序に入れて参りませうと鐵瓶を携へて立つて往く开も此の内は看客も已に推知し給ふらん築地一丁目藤井權兵衛と云ふお春には義理ある叔父の家にて權兵衛は以前長野縣の士族にて十四五年前岡山縣に奉職中お春の實父富永庄左衛門の妹を娶り其の後免職になつて東京に出でしが随分山氣の有る男なれば手廣く商法を営み居る内に家内は病氣にてなくなり今は後妻の事なれば實の親類と云ふではなけれどもお春の實父が東京に出でし時世間に知るべがなければ昔の縁故を以て懇意に交際をなし其の病中にも呉れくお春母子を權兵衛に頼み一家の後見を任したれば權兵衛は婦人と侮り親切を表に示して内實には金銭上にも不正を働き老母の世を去りし後は相談の上にてお春を宅に引き取りしがお春は發明なれども未だ

年弱き婦人の上に其の性質も至つて溫和にて近き親類のなきを心細く思ひ叔父々と敬ふに付け上り非道の振舞も多かりける却説お春は權兵衛に呼び立てられ心は少しも進まねども小き團扇を左の手に持ち籠甲の櫛にて髪のもつれを掻き揚げながら庭の飛石傳ひに表座敷へ至れば權兵衛は縁側に座蒲團を敷き頻りに扇を揮ひながら手箱の中より數通の紙面を出だして取調べ居たるがお春を見て聲を掛け「お春暑くはないかマア縁側へ出るが善い少しは風があつて涼しい様だソシテ氣分は如何だ 登大きに宜しい方で御座います」權兵衛は柔げし頭を掻き乍らニコ／＼した顔付にて 舞夫れは何よりの事だ時に茲へ呼んだのは外の用事でない此間中から二三度話し掛けたお前の身の上の事だが實は内々己れの處へ懇望をして来た人もあるからお前の内心を聴て見るのちやが何と程よい口があつたら嫁に行く氣はないかと云ひつゝお春の顔を視るお春は心の内にゾツトし乍ら色にも現さず 登其の御話は先達て内から度々窺ひましたが私の様な者でも一家の主人で御座いますし其のうへ御承知の通り親の存生中に参しの約束をいたした人も御座いますして其後ち行方が知れませんけれども母もなくなります前



(畫面本版初)

に呉れんも遺言を致しますし私も此の上マ
ア一兩年は亭主は持つまいと思つて居ります
ト云へば權兵衛は猫撫で聲にて「ハテ悪い了簡
だ己れもお前の内で二度深谷に逢つたことが
あるが兄さんの御見立は些ト間違て居る様で餘
り氣の利た風の男でもないぜして何だか怖ろ
しい巧をして出奔をして仕舞ひ今では生て居
るやら死んだやら様子が分らんぢやないかアン
ナ不都合な奴に義理立てせよと云つた姉さんの

氣が知れぬソシテまア能く考へても見るがいゝ
お前は自分で何程學問が出来發明な積りでも世
間知らずの生娘だから自分で一家の支配をする
ことは六ツケ敷からう實は他人の此の己れが引
き取つて世話を焼き後見人の様になつて居るも
のゝ年を取つて見ると込み入つた事をするのが
嫌になりまだ此の半ケ年の計算書も出来ずお前
から催促を受けて困つて居る様な都合だお前も
早く身を極めて自分で家を持つがいゝぢやない
か今では月主の事だから他家へ往きたくなけれ
ば相談次第で此方へ養子に取る様な都合が出来
るだらう夫れも學問もあるお前のことだから一
通りな人なら己れが勧めはせぬ人品が善くて金
がありソシテ世間に名前もある人でお前も多分
一兩度は逢つて顔を知つて居るだらうと思ふが
若し此の縁談が間違ふと此の權兵衛の爲めに不
都合イヤナニお前の爲めに善くないから強情を
張らずに己れの云ふことを聞くが善いトくり返
して説き勧められ「愈よ叔父には何か巧のあつ
て此身を強ふることならん如何にも憎き口上と
思へども元來溫和の性質なればデット胸を鎖
め「叔父さんの思召は誠に難有う御座います
が私は先程も申しました様な都合ですから先方
が如何様な人でありませうとも只今縁付心は御

座いません西洋では氣の合うたものが夫婦の約
束を定めて夫れから表向に兩親に相談を
するさうで御座います御恩を受けました叔父さ
んの御辭を返しましては済みませんが亭主を持
つ事丈はどうか私の心に任せて下さりませと
云へば權兵衛は少し急ぎ込み「スリヤ如何あつ
ても此の叔父の言ふことを聞かぬ氣か「豈マア
左様なもので御座いますト判然云ひ放てば權兵
衛は顔に青筋を張り手に持てる煙管を以て荒々
しく煙草盆を叩き「此の強情阿女奴と言ひ掛け
しが何思ひけん俄に聲を和らげ「ナル程お前
の心掛けは感心ダ女と云ふものはさうなけれ
ねばなるまい就ては能く聞いて置きたいがお前
はさう云ひ出したからには何様な事があつても
其の口上を變へはしまいね「春ハイ「權夫れ
ではお春お前は當永家の財産を自分のものと思
ふことは出来ぬぞと云はれてお春は顔色を變へ
「是れは叔父さんの御辭とも存じませぬ女な
がらも亡くなつた親の跡を續ぎました私が自
分の財産を自由にすることが出来ぬト仰しやる
のは如何いふ譯で御座います「權そんな氣樂な
考へで居るから強情張つて己れの云ふことを
聴かぬのだ子を視るは親に若かずとやらで兄さ
んの前見のあつたのには感心するお春此れを見

よと四角な顔をフクラシテ口の中にブツ／＼云ひつゝ手箱の中より一通の紙面を取り出して春の目の前に突き付ければお春は不審ながら手に取りて之を披き視るに亡父の生前に認めしと思はるゝ遺言狀なり

遺言狀之事

拙者死後娘春ヲ戸主ニ立テ貴殿後見人トナリ一家ノ財産御管理可被下候先年深谷梅次郎ト申スモ拙者ノ養子ニ致シ娘春ニ娶ス様契約相結ビ置キ候處其後梅次郎儀失踪致シ行方相分ラズ若シ拙者死後三ヶ年ノ内ニ梅次郎歸家致シ候得者同人夫婦へ家財一切相譲リ可被下候若シ此ノ期限ヲ過ギ梅次郎歸家致サズ娘春儀他ヨリ婿ヲ取ル事ヲ相拒ミ候得バ家産十分一ヲ渡シテ別居致サセ家名ハ健カナル養子ニ譲リ永遠ニ富永家ヲ維持スル様幾重ニモ御注意可被下候遺言狀因テ如件

年月日 富永庄左衛門 印

藤井權兵衛殿

如何にも不意の事なればお春はハット驚き一時は眼も暗みし程なりしが固より思慮ある婦人ゆゑ心を鎮めて二三度も繰り返し元の通りに疊み

推し戴いて權兵衛に返し「叔父さん此通り御父さんの御遺言が御座いますれば此後貴君の御辭に従ひませう其の内お父さんの御病中には私と御母さんが看病いたしまして外に色々御遺言も承まはりましたが斯様な書き付けを貴君に御渡しになつた事は私は勿論御母さんも御聞きなされたことが無い様に思ひますト話す内にも兩親が病中の事など思ひ出し早や涙ぐむを權兵衛は見ぬ風にて「丁度御死去になる四五日程前に御見舞に往つた時お前もお母も側に居なかつたが此の書き付けを枕の抽斗ではない皮文庫の中から出して色々跡の事を御顧みになつたのが今に目の前に見る様だ何ほ氣丈夫な人でも大病になると平生とは違ふからツイお前達に話すことを忘れて仕舞はれたのだらう」お春は少し笑を含み「叔父さん夫れでもお父さんの御病氣の時には貴君は宇都宮へお出でになつて居まして御父さんのお隠れになる前の日に御歸りになつたでは御座いませんかと問詰められてイヤ是れは遣り損うたと思ひしが中々盡トキ老人なればマカサ額付にて「左様々々三年跡のことだからツイ老へ違ひをして居たが矢張り此の書き付けも其の前の日に受け取つたのであつたト聞いてお春はデット權兵衛の顔を眺め

「叔父さんマア一處其の紙面をお見せ下さいましト再び遺言狀を手にとつて押し開き「叔父さんマア能く御覽下さいまし此書は能く親父さんの御手蹟に似ては居りますが前の文章は御親父さんの御名前を書た處と少し墨色が違ひますし跡から書きべれたものの様に見えますから何だか不審でなりませんト云はれて權兵衛は聲を荒らげ「此の立派な紙面を謀判とでも思ふのかを馬鹿にするにも程があるお春能く聞いて置け已も昔は小役人もして些トは世の中の事も知つて居る男だ其の上この紙面はな此の間中より二三人も法律に精しい人に鑑定をして貰うたが前が何にほど強情を言つても遺言にある三年の規限が過ぎて居るから己れが貴様を迫出して外から養子を取り富永家を自由にするのも勝手次第や若し裁判沙汰になつたら代言をしても此度勝して見せると云ふ人が幾人もあるぞ夫れも餘り好んだことでもないと思つて親切心で婚を取るのを勧めるに難有いとも思はず健かな紙面を偽書である云はねばかりの口上は此の叔父へ對して失敬な申分ではないかと囁付く様に怒鳴り立つればお春は差俯向て詞もなかりしがキツト思案を定め「私が惡う御座いました何卒御勘辨を下さいまし此の通り御父さん

の御遺言も御座いますればお思召に従ひまして早く身を極める様に致しませうと聞いて権兵衛は占めたと思ひ「さう穩かに出て来れば何も理窟を云ふことはない其口上を聞いて大安心をした婆さん」ト呼び立つれば権兵衛の後妻おたかは障子の蔭より出で来りお春の側に座を占め黒き入歯をムキ出してゲタ／＼笑ひ乍ら「お前は孝行者だから誠に感心するヨお前のお親父さんも草葉の蔭で何の様に御喜びなさるだらうオホ、其の内何れも急いで婿を取らねばならぬと云ふ譯でもないから徐くりと相應な人を尋ねるが善いお春ちつと笑つてもいゝぢやないか何故其の様に考へ込んでお出でかネと云ふ内に一人の女はデット次間の襖を開き疊に手をつき「お嬢さんアノ松田のお秋さまのお兄さんが何かお妹子から御言傳がありますとかで御玄關まで御出でになりました 春、オヤ何の用だらう私もお目に掛りたい事があるから私の居間へお通し申してお呉れ叔父さんモウ御用は御座いませんか左様ならト起つて行く背影を見送つて権兵衛夫婦はホット一息、權女でも生意氣に本などを讀んで居つて細かな處まで氣が付くから中々骨が折れて已れは大汗になつたが實印の押してある遺言狀には閉口したと見える川

岸の智慧は感心なもので此の上松田が旨く話し付けて三四度も川岸に逢はしさへすれば九分九厘思ふ様になるだらう是れで質入れにした公債證書の尻が割れる氣遣もない上に千圓と云ふ大金が手に入るのは有難いぢや無いか婆どん前祝ひに一杯遣うから下女に吩咐て須美屋から二三品取り寄せてお呉れ「モシ／＼奥様「オヤ吃驚した何ぞ用があるのかえ 下女「八百屋が参りました「今日は何にも入らないヨお前の様に人の耳の側へ来て大きな聲を出すものではない女は靜かに言をいふものだト罪も無き下女を叱り付けるは餘程六ヶ敷老婆と知られたリ

第五回

閑室 閑基 閑談 閑計
小人 設辭 將 陪 秀 才

盤上に石を下す音バチ／＼「甲「サア當だ乙「一寸お待ち下さい 甲「生死の界になつて俟つて堪るものか 乙「夫れでも先刻僕の方からも待つたちやありませんか 甲「よろしい如何とも打つべしモウ助かる手はあるまい 乙「マア喧嘩をせざに出と打たう 甲「サア此れで切れた一隅みんな死んだモウ恢復の望みはあるまい 投げべし 投げべし 乙「此度は大失敗閉口々々何も先生の碁は狡猾だからツイ欺されてならぬ 甲「イヤ君の手も餘り御上品の方ではない様だハハ、

今局に對する一人の年齢三十内外にて鼻高く眼大きく面色雪の如く雪々たる偉丈夫なるが鼻下に少しばかりの髭を生し物を思慮する毎に眉間に川字の皺を寄する癖あり是れ別人ならず此の家の主人川岸萍水にて鼠色「フナエル」の浴衣に水色縮緬の「ヘコ」帯を結め白き鹿皮のうに黒革にて造りし團形の座蒲團を敷きて之に坐し床には狩野家の古畫を掛け瓶中に百日紅數枝を挿み架上に數十卷の英書を列べ朱檀の唐机の上には類聚法規二三冊あり傍らに數十葉つつに束ねたる許多の紙面を積み重ねたるは鑑定を頼まれたる書類にやあらん今一人の木綿の浴衣を着して小倉帯を結め丸顔にて矮小なる男なるが名を松田肇と呼び四五年前川岸の内に食客と爲り昨年より自ら代言に従事し常に川岸の手先となりて奔走せり 河基も好いが氣を結めるから熱くなつて来る様だ暫時休息しよう夫れはさうと松田大分夫の一件は都合が善いぢやないか僕も當春井生村樓の演說會に夫の女の來て居るのを見付け随分イ、女と思うたから段々探索をして見ると築地の英語女學校に通學をして居ることが分り幸ひ君の妹が一つの學校に往くと云ふので君に事情を打ち明て素生を調べて貰ふと父母も兄弟もないと言ふことだ

から占めたと思つて君から藤井まで内々に縁談を言ひ込んでくれたが今では一家の戸主で失踪をした男を尋ねて居るから如何程説諭しても承知をしまいと云ふので少し宛が違ひたれでは何とか謀略を廻らさずばなるまいと思ふ内に藤井が借金引継いで願ひ立てられ君の紹介で僕に鑑定を頼んで来たので能く取調べて見ると夫の女へ證書を入れて預つて居る公債を抵當に置いてあるから此れが知れると外の預金の私用まで發露して仕舞ふ様になり困るによつてドウか善い智慧を貸して呉れると云ふに付込んで僕の懇望を話し夫の女を呉れれば千金やらうと云ふと藤井は一も二もなく承知したものの一ツ困るのは夫の女が當分嫁入りをする氣のないのであるが藤井も中々手に合はぬ奴で女の親が生きて居る内にフトした事で手に入た印形付の紙面は何かの時の用に立つ事もあらうからと思つて持つて居る様子だから一ツの謀略を考へ付き……ト云ひツ、四方を見廻して小聲になり「遺言狀の偽造とは旨く出来たではないか夫れから君の周旋で夫の女を此の内へ三度も誘き出して十分に僕の親切心を見せて置いたからモウ表向に掛合つても大抵間違はるまいと思ふが此の上とても君の御盡力を願はね

ばならぬぜ 然イヤ前日先生の御申付があつたから國へ歸つて居る妹の傳言があると云つて藤井へ尋ねて往くと直き出掛けて来て貴君は代言をなさると云ふことだから御尋ね申しますが獨り娘が親の迹を嗣ぎ戸主になつて二三年も過ぎて後遺言狀があると云つて後見人が別に養子を取つて其の女を別居させる様なことが戸籍の規則上出来ませんかと問うたからソラ來たと思ひ吹き出しさうに爲つたが知らぬ顔をして委しう事情を尋ね何様法律上では随分入組んだ事件でもあり僕には容易に判斷が出来ぬから有名な川岸先生に鑑定をして御貰ひなさるが宜しいと辯に任せて説き込み御宅へ件れ出して來て御懇意にして仕舞たのだが我邦の現行法では佛蘭西などと違ひ裁判所では何事も遺言通りに執行さすからアノ策略は上出来てマア立派に陥し穴に入れた様なものですナンボ發明でも謀書に氣が付かぬのはサスが女で可哀さうなものぢや其内先生の様な守銭奴ナニ金の取締の善い上に度々細君を取替る人が何程美人で教育があらうとも千圓出さうと云ふ御奮發はどう云ふ氣か私共にはサツパリ分りませんト云へば川岸は鬚を捻り乍らカラ／＼笑ひ「是れには色々思慮のあることで先妻は國に居る時兩親の娶

つて呉れたのであるから所謂の糟粕の妻で容貌が悪い上に不意氣でならぬから追ひ返して仕舞たのぢや夫れから柳橋のお紋を落籍して園つて置く内子まで出来たから表向に家内にしようかと思つたが能く考へて見れば社會の風潮が進むに従つて段々婦人の權力が盛んになり公會などにも多く婦人が出掛ける様になる傾きがあるが今では維新の際に士人の品行の亂れた結果で泥水あがりの者でも何々夫人と呼ばれて貴婦人の間に入る事が出来るけれども遠からぬ内に西洋風が移つて來て素生の正しくない婦人は上等社會で擯斥する様になるに相違ないから藝者などを家内にするのは不都合ぢや我々も他日志を得て弘く内外の紳士に交際をしようと思へば成るべく時勢の分る婦人を見立てて置かねばなるまい夫の女は風俗も卑しくなく教育があつて英學も相應に出来ると云ふから妻にしても不都合はあるまい其のうへ随分親の遺産がある様子だから別して妙だ夫婦の間に財産を區別する法律の確定せぬ我邦では勢力のあるものが都合の善いと云ふ様な譯で一度婚禮さへすればアノ女の所有品を利用することは世話も苦もない話しサソシテ事が成就した處が千圓出すに及ものかホンの口約束で證據のない上に藤井

も謀書を造つたと云ふ後ろ聞いことがあるから如何して僕を相手取て訴へ出る事が出来るものか「松田はイト感心せし體にて「先生の『ポリシイ』は妙です政事家の考へは違つたものぢや併し先生少し困つた事が出来掛つて來ましたから御注意がなければなりません」云「夫れはまた何の話しかネ 松「イヤ先生の策略は大抵成就したものの藤井は五百圓の口で出訴せられても居るから能く話しの纏まるまではお春さんを外へ出して置く方が善からうと云ふ相談で病氣の保養をするが善いと親切ごかしに湯治を勧め込み藤井の婆さんに伴れさせて箱根へ遣つたのが些少失策で昨日木賀から婆さんの手紙が來ましたさうだが其の文面の様子では彼の國野基が其の前から湯本の福住に居つてお春さんに出逢ひ一時間餘りも密々話をするから婆さんも不審に思ひ立聞きをして見ると泣くやら笑ふやら何でも前方から交情のあつたものとしか思はれぬから其の翌朝無理にお春さんを勸めて木賀へ往つたと云ふことですが夫れで考へ合はして見ると當春から演説會のある度に夫の女が傍聴に來て居たのは多分先生の演説を聴く爲めであらうと思つたにさうではなくて國野に心があつてのかも知れませんと話しの中に川岸は眉間を川の字

になし「ハテ國野も中々油斷のならぬ奴ぢやの松「マア御聞きなさいソコデ一先づ處を替へては見たものの何時國野が尋ねて來るかも知れんから心配でならぬト婆さんから報知がありましてから藤井の老人も驚いて早く伴れて歸る様に電信を掛けて置いたと先刻彼の内へ參つたとき話がありましたが愈々婆さんから云つて來た通りに違ひがなければ折角の謀計も皆んな畫餅になつて仕舞ひさうだ先生此後如何なさる御心算ですかト云はれ川岸も少し意外の體にて姑く手を束ねて思案を爲せしが忽ちカラ／＼と打笑ひ「相手が馬鹿正直な國野と一人の女だもの何とでも處置があらうぢやアないか松田君一寸耳を貸せ斯ダ分つたか 松「成程面白いアノ新聞紙は先生に縁故がある上に讒謗が好きだから直に夫れを書くに相違ない今歸り掛に頼んで見ませう「川「イヤ／＼まだ用がある斯ダ善いか 松「妙計妙計、川「夫れから斯するのだ 松「ウン／＼ハテ夫の梅吉と云ふ奴は此の間賣茶で逢た女でスネ彼れか成程フーン以前國野とナールホド夫んなら能く吹き込んだヨシ／＼ナール程ソーダ「川「分つたかさうして其の費用は斯するのだ 松「夫んなら纏頭まで書付にして 藤井に拂はせるのですか 川「知れたことヨ 松「如何も先生の

處置は嚴酷だから對手になつた人は随分難儀だ川「些々たる人情に係はる様では何事も出来る氣遣はない君が一方さへ煽動して呉れたら女は僕が旨く欺し付ける心算だ「忽ち門外に鈴の音がチリン／＼と聞え新聞賣の聲にて今日毎夕新聞縮入朝野新聞 川「政事上のことは言ふまでもなく何事を爲すにも機關がなければならぬものだ其の内國野も少しは世間知に盡肩のある男だから能く氣を付けて外の新聞紙に嗅き出されぬ様に注意せねばならんぜ

第六回

一紙新聞巧難問佳人才子
三杯醇酒將廣礪石心鐵腸

端歌「春雨にしつぽり濡るゝ鶯の羽風に匂ふ梅が枝の 含花に戯れしをらしや子鳥でさへも一筋に寝ぐら定めて氣はひとつ 含わたしや鶯ぬしは梅やがて氣儘身まゝになるならばサツサ鶯宿梅チヤナイかいナ「チョイト貴君少し御發しなさいな △三味線は騒がしくて話をすることが出来ん少し止めて呉れんかト云へば玉助と云ふ藝妓が三絃を側へ置き「ケッコウ私も先刻からさう仰しやつて下さるだらうと思つて居りましたヨ松田さん一挙願ひませう ●「オイキタシャン／＼／＼勝たシャン／＼／＼又勝たサア飲まぬか 玉松田さんは人が惡くつていけ

ませんヨと云ひながら傍を向き「貴君一つ御酌をしませう△久し振で大層酩酊をした玉未だ少しお顔に出ませんワ後生ですから一つ御酌をさして下さいな△イヤ此の大杯にさう注がれては大變だ玉竹村さんお猪口の中に子子が湧きますヨ些ト頂戴しませうお竹チヤン是れは儼りさま未だ誰れぞ外に來ますかト問へば此樓の下女お竹は「い、エ姉さんお一人で玉松田さん餘り寂しいぢやありませんか誰ぞお呼びなさいな●玉助一人で三人前の代理が出来るぢやないか玉オヤ技倆のよいことネ△イヤお前の腕ぢやアないヨ臂の大きいことがサ玉オヤマア口の悪いこと貴君の御口にはドウシテ叶ひませんヨ△さう言ふ先生も餘り口の善い方ではない様だハ、玉助一寸耳を貸して吳シナ善いか玉アノ鳥森のすね分りましたト下女を手招きして次の間に至り何か私語き座に返るは跡の藝妓を掛けしと知られたり此の處は新橋の或る船宿にして茲に會合せる客を何人々と問ふに松田肇と竹村某と云へる松田の朋友と國野基の三人なり竹村は猪口を國野に獻しながら「國野君御入湯中は喉面白いとが御座いましたらうネ今朝湯本から御歸りでしたか」國野は手に持つ猪口を下に置き「左様

でした湯治場は随分混雑で閉口しましたが圖らず武田に出逢ひ妙な都合で一二人同志を得て時勢を談じ誠に愉快でありました就も正義社員になりたいたと云ふから近い内に兩君を始め川岸君などへも御紹介を致しませう竹村夫れは妙だ我黨の多くなるのは何よりのことですト話を松田は傍から押止め「兩君は酒席でも政事上の話をするから野暮でならぬ玉助チツト御酌をせんかダガ國野君は此んな老婆では飲めぬと云ふだらう玉竹村さん可哀さうに斯う見えても當年が十九年ですワ松ナール程十九年八十八ヶ月かねハ、玉そんな惡口を仰しやると言ひ付けますよト云ひつゝ松田の肩を叩く眞似をして國野に向ひ「サア旦那注ぎました國先刻から一つ飲むト直に注がれるからツイ大醉になつた竹村君先刻から君に聞いて見ようと思つて居たが武田はまだ上州から歸つて來ぬかね松國野君はまだ夫の驍勁を御承知がないのかト聞いて國野は少し驚きし様子にて「箱根から歸つて來るト直に君の御手紙を見て出掛けて來たのだから何にも聞く間がなかつたが何ぞ失策でもあつたのかね松前橋の同志からまだ報告がないので委しいことは分らぬが何でも懇親會の席上で大議論があつて武田を始

め兩三人警察署に拘引になつたと云ふ事が今日の諸新聞に出て居るので川岸君などと寄合つて先刻まで相談をして居たが君が御歸りになつたと云ふことだから此の樓へ參つて呼びにあげたのだ」國野は眉をひそめ國又例の酒から起つたのではないか知らん困つた事だ其處の姉さん此家に新聞が來るかネ下女「ハイ殘芳新聞が參ります國一寸貸して下さい下女「畏まりましたト云ひつゝ帳場へ行き一枚の新聞を持來るを國野は手に探つて之を讀み「成程この新聞にも一寸出て居るが未だ委しいことは分らぬと見えるな竹村君濟んだら一寸御見せなさい此の新聞は随分賣れると云ふことだが今日の紙上に何か面白いことがあるか知らんナニ「美人の浮氣」些ト色氣がありさうだぞト云ひつゝ一寸松田の顔を見れば松竹村君皆んなに聞える様に讀んで御覽竹「先づ茲で一杯頂戴ソラ讀むぞ靜かに聴くべしエー築地邊とのみにて町名番地は聞き洩らせしが紫の花に纏ある家の内にて夏とか冬とか云ふ様な名前前の女は年ごろ十八九にて閉月蓮花の美貌の上に當世風の學問も相應に出来るので随分近邊にての評判娘なるが色は思案の外とやらで是まで度々艶聞を流せしこともありしが先日病氣にて箱根



(初版本通書)

に湯治に赴き」ト讀みながら横目にてデット國野の模様を窺ふに國野は少し驚きし様子なり竹村は一層聲を張り上げ「其の歸りに一つの馬車に乗りし美少年に思を掛け生意氣に少々知つて居る洋語にて思を通じとう／＼車上にて密かに約束を定め歸京の後も大逆上せであると云ふ評判なり何ほ別嬪で書物が讀めても此の御品行では花吹く春に」ハムア春の字に〇點が付居る『逢ふ事は出来すまい』ト讀み畢りて新

聞を膝の上に置き 竹築地邊とあるので考へて見れば松田君の此の間話した女の事では無いかしらん」松田はヘタ／＼笑ひ乍ら「前後の文で能く分るではないか 僕は事情を能く知つて居るから今に新聞に出されはしまいかと心配をして居たが隠れたるより顯はるゝはなしで何も仕方がない譯サと話を傍にて聞き居たる王助が「何處の御人だか知りませんが其様な事を書れては溜りませんネ 松、自分のことが度々新聞に出るものだから『シンパシイ』(同情相憐れむの義)が起ると見えるハ、ハ、ハ、ハ、玉なんですネ 松、分らんで仕合せサ」此の時まで國野は手を束ねて思案の體なりしが何となく不快の顔色にて松田に向ひ「君は其の新聞に出て居る女を御承知かネ 松、ウン 僕の妹と一つの學校に行くから能く知つて居るが容貌は左まで悪くもない様だけれど女の癖に演説などが好きな飛び上りもので其のうへ品行が悪く少し氣に入つた男と見ると色々な手管で引掛けては情婦になるかと思へば直に厭が來て又外の男をこしらへるのでは是れまで幾度騒動があつたか知れん實に女と云ふものは見掛けにはよらぬものだ此の節生中洋學などする女は兎角品行が悪くなくつて困るが夫れに欺される男も随分馬鹿だト誠にや

かに饒舌り立て乍ら風と氣の付きし様子をなし「箱根へ往つて居つたと云へば國野君は何處でか其の女を見掛けはせなんだかと問ひ掛けられ「ナアニそんな女に逢ふものかと口では云へども心中さながら火の如くクワット怒を發せしも亦無理ならぬことに才氣の勝れし國野にてもお春とは是れまで深く交際せしにも非ず一度其の談話を聞いて才氣を感心せしまでに深く人物を知るに由なく其の上に曹參の人を殺せしことを告ぐるもの三人に及べば其の母も機を投じて奔ると云ふ喻もある如く前には箱根にて二人の書生の話を聞き今や新聞にて不品行の模様を委しく書き立てしのみならず松田までも其の素生を知つて新聞の訛傳ならぬことを保證せし程なれば自ら其の疑心を解くに由なく何となく不愉快なる感情を起せしが其の氣色を人に曉られまじと話を外に紛らせども憤怒の色は自然に顔に現はれ「ア何だか胸が悪いト云ひ乍ら前にあるコップを探り手酌にて酒を注ぎ一口に飲み干すを竹村と松田は横目にてジロリと睨み心の内にて旨く行き掛つたトこの時次の間の唐紙を靜に開き「皆さん今晩は有り難うト挨拶をして此の席に入る藝妓は二十の上を二ツ三ツ越せしと見ゆるが數寄屋の衣裳に淺黄博多の帶を締め

白雪を欺く顔色の燈火に映ずるを見れば又棄て難き容貌なり國野と顔を見合せてオヤと言ひながら四邊に氣を兼ねし谷子にて前に在る銚子を手にして松田に向ひ「貴君先日：一つお酌を致しませうト云ひ紛らせば松田は笑ひ乍ら「今の様子では梅吉は國野さんとお馴染の様だねえ 梅いゝエ先日一度御目に掛つた計りですワネ貴君ト云ひつゝデット國野の顔を視る國野はホロ酔機嫌にて「左様々々ト云ひつゝ肚裏には「まあ茲でアノ女に逢ふとは意外千萬デヤ」是れより新たに有も出で藝妓二人の取持にて執れも興に入りしが國野は元來下戸なれども此の夜は料らず酔を過し座に堪へ兼ねて踉蹌を下り手洗場に行けば梅吉は迹に従ひ金燈籠の影に佇み國野の出るを待ち杓を把つて水盤の水を汲み國野の手に濯ぎながら「貴君誠にお久し振でしたネ 私もお別れ申してから色々難儀な目に逢ひまして二三ヶ月跡東京へ歸つて來ましたが先日賣茶で大勢の御連中に出ました時に何とか云ふ御方が頻りに國野々々と仰しやるので能く聞いて見ますと貴君に違ひ御座いせんからくれゝお傳言を致して置きました能くマア掛けて下さいましたネオヤお危う御座いますト云ひつゝ國野の肩に手を掛く

れば國野は燈籠の光にて梅吉の顔を眺め 國お前が此地へ來て居ようとは夢にも知らなんだから先刻顔を見た時は吃驚したがお前に逢つたのは何年程跡であつたつけの 梅越か三年程になりますワ旦那今晩は急いで御歸りには及びますまいネ私は色々お話をいたしたいことが御座いますマア貴君此處へ入しやいませト下座敷の今客が歸りしと思ししく蠟燭の影の薄暗くなりし内へ伴ひ入れしが程なく此樓の下女が雪下燈を手に持ち縁側を歩み乍ら二人の話を聞き付け「アノ國野さんは爰に入しやいますか梅吉さん参つてイ、ですかと云ひつゝホツト笑ひ乍ら障子を開けて内に入り「旦那御内から御人が参りまして此の御手紙を差上げて御返事を戴いて呉れいと申しますト一つの手紙を差出だせば國野は手に受取り「燈が暗いネ蠟燭の心を把つて御呉れと云ひつゝチガ／＼する醉眼を開いて手紙の上書を見れば「國野様春より」とあり國野は醉に紛れて姑く先刻の不平を忘れて居たりしが今や春と云ふ文字の眼に寫りしより怒氣忽ち心中に起り面上宛がら朱を濯ぐが如く手紙を把つて封のまゝ二つに引き裂けば梅吉はアツケに取られ「旦那夫れはどうした御手紙で御座いますト云ふ内に國野は二ツの切れの口の中に押し込み

左も腹の立ちし様子にて齒にてムシヤ／＼噛み縁側に投げ出だせり下女は不審さうに國野の顔を眺め「旦那如何なすツたので御座います御返事はどう申ませう」國野は荒ら／＼敷聲にて「狸やら狐やら分らぬものに返事は致さぬと云つて呉れえ 下女さう申して宜しう御座いますか 國それで宜しいそして使はどんな奴かネ 下女「ハイ二十計りのお女中で御座います 國茲へこんな手紙を持つて來る奴も随分馬鹿だア一睡いト云ひ乍ら臂を枕にして前後も知らず其處に睡れば梅吉はニツコリとして「姉さん憚りですが枕とカイマキを持つて來て下さいナ」是時二階にては松田と竹村は玉助を相手にして頻りに騒ぎ居たるが松田は風と氣が付き「國野はドウしたカネ 玉助下座敷で御寮で御出でナナル様ですト聞いて松田はソツト舌を出だし竹村の耳に口を付け「梅吉が呑み込んで居るから大丈夫デヤダガ奥二階に居る奴は秋野の連中の様だから見付られると悪いモウそろ／＼引揚げようデヤ無いカ

第七回

忠婢談事 實明 敬疑 惑
淑女説心 情陽 約婚 姻

二階にて手を打つ音バチ／＼／＼「ハーイと應じながら一人の下婢がト／＼階子段を昇り

「國野さんお目覚めになりましたか。昨晩は大層御機嫌でした。おと笑ひ乍ら云へば國野は蒲團の中から重さうに頭を擧げ「下月の癖に何云ふ譯かツイ酔すぎて大失策をしたお松どん喉が乾いてならぬから水を一杯持て来てお呉れ。お松オヤ昨晩お枕元へ鐵瓶に入れて置きました。が取り換て参りませうか。國イヤさうか。ト水を「コッブ」に瀉してグツト飲み「お松どん此家へ歸つたのは何時頃であつたかねソシテ歸つた時にはどんな都合であつたのか少しも覺えて居らぬが何れも失策をしなければなんだかね。お松彼れ是れ一時で御座いましたらう餘りお歸りが遅いものですからお氣遣ひ申して居りましたら秋野さんと御合乗でお歸りになりました。秋野さんも誰れかと新橋へお出でになつて居りまして且那の酔つて一間に休んで御出でのを無理に起して車に乗せて來たとて門口までお立寄りになりました。且那は平生お謹しみの善いのに昨晩の様なことは不思議だと皆んながさう申して居りますよソシテ私が藤井にお出でなさるお嬢さんの御手紙を持つて参りましたら大や猫には返事をせぬと仰しやつたさうで御座いますから私も腹が立つて其の通りお嬢さんに話しますとお嬢さんは大層御心配の御様子で御座いました。貴君は御承知

ではありませんがお嬢さんは平生から貴君のことと御心配なさいまして陰ながら貴君の御世話となさつたことも御座いますから貴君もあの様な事を仰しやると罰があたりますよ。國夫れではお前は是までアノ女を知つて居るか。下玄知つて居りますとも。私は昨年から藤井へ奉公をして居りましたものト聞いて國野は首肯さう「さうか夫れで分つたそれならお前は春さん」の人格を善く知つて居るだらうネ。下玄誠に御本がお好で御座いますして學問が御出来なさると申すことです。が平生御内輪の上に奉公人などへ御優しいものですから誰れでも譽めんものは御座いません。そして義理のある叔父さんなどへ能くなさることと申したら藤井で見て居て涙が流れる様で御座います。ト聞いて國野は姑く首を傾け「夫れでも世間の評判では是れまで度々浮氣なことがあつたと云ふぢやア無いか」お松はイト残念と思ふ氣色にて「貴君までがそんなことを仰しやるから仕方が御座いません。此の頃新聞で色々なことを書き立てますのは此度意地の悪い藤井の旦那とアソノレ何んとか云ひましたつてお嬢さんを貰はうと思つて居る人が新聞屋に頼んで出したのに違ひ御座いません。私は腹が立つて新聞屋に囀付いてでもやりたい様に思ひま

す。お嬢さんも國野さんがあの新聞を御讀みになつたらどの様に私をお蔑視になるかも知れんと大層心配をして入らつしやいます。昨夜も旦那の仰しやつたことを話しましたら國野さんは餘程御立腹なさつたと思はれるから明朝御様子を見て内々知らして呉れいとくれ。と仰しやいました。旦那何卒一筆お手紙を出して下さいません。ト云はれて國野は暫し考へ「さう聞けば猶のこと此方から手紙を出すも極りが悪い様だ。下玄構ひますものか夫れと今朝は先刻皆さんの御膳も済ましてお晝までは暇で御座いますから茲の御掃除をして置いて築地まで一寸往つて参りませうか。國御苦勞だがさうして貰はうか」それより國野は起き出でて淨水を遣ひ腹工合惡しとて白粥二三杯を啜り枕を出して横になり獨り熱ら思ふやう「我れ四五年前までは大酒の癖があり度々朋友からも忠告を受けし程なりしが遂に大病を引起し一命をも失はんとする程になり幸に醫藥の力にて恢復したれば心に誓つて酒を廢し止むを得ぬ時ならでは杯を手にするともなかりしに昨夜は旅行の勞れの上に朋達に強られ前後を忘るゝまでに至りしは我身ながら不覺千萬ぢや其の上今お松の話によれば夫の新聞の一件も何か込み入つた事情が

あるかと思はれる貧生の松田竹村の兩人が用事があると云つて此の身を酒樓へ誘引し不相當な散財をなしたるも一つの不審である夫れのみならず大勢の前で新聞を読み上げ口を極めて彼の女を譏訴し我が以前田舎にて逢ひし藝妓を古馴染とでも思ひしか竊かに口を掛けて置いて此の身に酒を強しは何か巧みのありし事ならん深く事情も取り計さず煽動に乗つて憤怒を起し思義ある人を罵詈せしのみか不平の餘りに酒量を過し婦人に心を奪はれんとせしは返すくも淺慮の至り我れ國家の經綸を志し此の繁雜な社會に立つて事業を成さんと欲しながら一書生の權謀に陥る様にては有爲の政治家となることは思ひも寄らぬことぢや畢竟此まで讀書にのみ精神を費し世應人情を察することに注意せざりし過ちならん何程内外の書籍を読みたりとて經歷の足らぬ時は多數の人を支配して力を政治上に展ぶる事は出来まいと頻りに心に感發せしは是れぞ國野が其の身を立てて熟練なる政治家と爲る端緒にて天晴れ前途に頼みある少年なり折から車の音ガラ／＼と門口に響き階子段の上り口より下女の聲にて「國野さんお嬢さんが入つしやいましたト云ふを聞き國野は枕を隅の方へ突き寄せて出迎へばお春は靜かに座に

就き互に一別以來の禮を述べお春は溢るる計りの愛嬌にて春國野さん能くマア早く御歸りしたなアさぞ途中はお熱う御座いましたらうト云へば國野は頭を掻き「イヤ昨夜は疲勞の處へ酒を強られて大醉になりましたから御手紙を下されたに甚だ失敬なことを申しさうです誠に面目次第も御座いませんと覺えず頰を赤らむればお春はニコと笑ひ「いゝニ何も御氣にお掛けなさることは御座いませんが國野さん昨晩は古いお馴染に御逢ひなされて嘸御愉快でしたらうネ 國愉快も何もありませんが何して左様なことをお聞になりましたかト眞面目になつて云へば春今朝委しい事を知らして呉れた人が御座いますオホ、國野は姑く首を傾け「ハテ不思議でならぬそれはさうとお春さん叔父さんの御病氣は如何ですな 春「病氣でも何でも御座いません全く私を貴君の御側へ置くまいと叔母の巧んだ事で御座います 國夫れはまた如何云ふ譯でト問ひ掛くればお春は少し愁を含みし顔付にて「マア私の身の上を御聴きなされて下さいませト是れより數年前母に別れて叔父の内に同居し母の遺言を守り許嫁の男を尋ねて居ることは叔父も承知でありながら二三ヶ月跡より急に縁談を勧め遂に思も寄らぬ亡父の

遺言狀を出だし叔父の言を用ひぬなら是非に及ばず別居をさせて外から養子を取ると言ひ出したことまで掻い摘んで話しサテ云ふ様「其の遺言狀は無くなりました親の書いたものでないことは一寸見ても分ります若しも夫れが本統のものですなら三年も立つ内に一度も話しのない筈は無いぢやありませんか夫れを證據にして訴へ出られまして私に負けようとは思ひませんが名ばかりでも叔父との間に裁判沙汰となるのも餘り面白いことは思ひません上に叔父は後見人で私の家の金銭まで預つて居ますから若し荒立てますと色々引纏れが起るに違ひ無いと思ひます夫れゆゑ叔父の辭に逆はずして私の身を立てる様にする外はないと考へ付きました處へ貴君も御知り合と思ひますアノ松田さんが尋ねて參られました此の度のことには叔父に踴押しがあに違ひ御座いませず大抵其の人も突き留めて置きましたから何にも知らぬ風で松田さんに相談をして見ますと餘ほど入り組んだ事件だから川岸さんへ頼むが善からうと御勧めですから松田さんの紹介で二三度逢つて見ましたが流石は世間に名のある御人だけ何取廻しの御上手なことと此の證書があれば如何しても強情を張ることが出来まいから本年中

には亭主になる人を極めることにして夫れまでに向うから預り金を引渡し遺言狀を返すことにして雙方證書を取替して置くが善からうと御勸になりまして其の親切と申すものは喩へやうのない程で御座いましたから却つて川岸さんの心の底が見えまして罪な様ではあります但し茲が裏をかく處と考へまして其の通りに證書までも書て叔父に渡し置きましてト云ふを聞いて國野は不審に思ひ「イヤ飛んでもない御心配なことが出来たものです今の御話しの通りですなら貴女は之れから如何なさる御積りですかナ春外に考へも御座いせんが何か私の……ト言ひ掛けて少し口籠り「私を不憫と思つて下さる人に御目に掛りまして心を打ち明けて御相談をして見たいと思ひます内に湯治に參る様になりまして箱根の湯本で御目に掛りましたが貴君は世間で御名前のある御人の上に此の内のお松から委しう御性質を承まはつて居りますから何か身の上を委しくお話し申して御恩召を承まはり度と存じます内の叔母は貴君と私が打ち解けて御話を致すのを立ち聞きをして邪推をしたと見えまして翌朝急いで木賃へ參りまして何か叔父と打合はせ至急の電報で東京へ呼び返したのですがそれから申すものは新聞紙の上

で度々私のことを色々と書き立てますがアレは何でも貴君に疑心を起させる積りで川岸さんの考へから出たものではあるまいかと思はれますソシテ先日川岸さんが御尋ねになりました新聞は自分が引受け正誤を出さして違ると大層親切らしい御話しのありました跡で浮氣なとか御身持が悪いとか大層貴君の讒訴が出ましたソシテ今朝も御出になつて貴君が昨夜新橋の梅吉と云ふ舊い御馴染をお呼びになり御連中を先きへ歸して獨り御宿りになりましたと問はず話りに饒舌で御歸りになりましたが何も川岸さんは利口で手に合はぬ御人で御座いますと話すに就いて國野は心の内に「憎き川岸の仕方ぢや」と一時はムツトせしが元來大量の性質なればダツト心を押して静め「夫れは迷惑千萬の話です昨晩十二時頃に歸つて來たのはお松も能く知つて居りますソシテ是れまでの事はお考へ通り川岸の策略に違ひありますまいが證書まで叔父さんへお渡しになつた上は此の後貴女は如何なさる御心算ですかネ 貴君に夫れ等の事を御相談致さうと思ひましたから昨晩貴君の箱根からお歸りになつたのを聞きますと早速手紙を差上げて御様子を伺つたので御座います國野さん貴君の御疑念が晴れまして私を不憫と

思つて下さいますなら何卒私の願ひを云ひ掛けて再び口籠れば國野はお春の顔を眺めてお春は顔を赤らめモジ／＼として居たりしが茲が大切な處ぞと思ひ直し「國野さん貴君は今日まで外に御契約をなされた御方も御座いませんなら誠に御迷惑ではありませうが私の身は今もお話し申しました通りで御座いますから何卒一人の女を助けると思つて貴君と私が夫婦になる契約をしたと叔父へ表向に掛合つては下さりませまいかと思ひ切つて言放ち顔を赤らめ袖にて面を掩ふ此の時國野は覺えず滿身に冷汗を流し胸もドキ／＼として姑く答ふことを知らざりしが稍やあつて威儀を整へ「お春さん世間に稀れる貴女の御人品一度お目に掛つてからは誠に慕はしく思ひますが才學もなければ資財もない國野基貴女と御縁を結ぶことは思も寄りません固より私の爲めには一通りならぬ恩義のある貴女のことですから水火に入つても御力にはなりませうが先日貴女より承はつた處では御母君の御遺言もあつて以前御契約なされた御方を尋ねて御出でなさるでは御座いませんか差違つた御難儀のあることですから夫婦の約束をしたと叔父さんへ申して置きまし

て俱々に其の御方の所在を捜して貴女の御宿志を晴したいもので御座いますと聞いてお春は少し悔しさうな顔付にて「いゝ前に私の内へ養子に参る筈の人は私も逢つたことは御座いませう家出してから早や五年になりますから兩親が生きて居りましても何時までも其の人に義理を立てよとは申しますまい夫れとも足らぬ勝ちのわたしですから貴君の御思召に協ひませねば致し方は御座いせんが……と云ふを遮り「國只今の御話で私も能く心に合點が行きました其のうち私も只今は書生の身分ですから當分家を持つことが出来る譯でも御座いませう才氣の勝れた貴女が永の年月お尋ねなさる人は定めて非常の秀才と思はれますが一時行方が分らぬとも其の内には御所在の知れることもありませう元來日本では男女が一度か一度顔を見ただけで同穴の契を結ぶから其の後に風波が起つて終身の幸福を全うすることが出来るのです貴女と私は御互に心を知り合つて居ると申すものの御目に掛つてからまだ日も立たぬことですから先づ私と貴女とが夫婦の約束を結んだことに置いて實際は學問上の交際には私も何とかして一身の方向を立てる積り

でありますから其時迄に貴女の御尋ねなさる人の消息がなくて愈々御互の心が合ひましたら其の時に成つて大禮を行つて同居をしても宜しいぢやありませんかト情義に協ふ金言にお春も同意を爲し兩人にて後々のことなど打合せ叔父へは國野と夫婦の契約せし様に告げ男女の禮を案さず互に親しく交際せしは實に得がたき節婦良士と云ふべけれ

第八回

凌雲雪氷姿長立悲風一
落春風金羽將還三壽木

登「オヤ入らしやいませ大分朝晩は暮し能くなりました今日は出でにならうかと思つてお待ち申して居りましたと丁寧に挨拶すれば國野はニコリ笑ひ「先日向島の七草を御一緒に見に参つて途中で川岸に逢うた時には彼の男も妙な顔をして居たぢやありませんか夫れはさうと此節叔父さんの御様子は如何ですな登「ハイ最初は餘程困つた様子で御座いましたが御心付の通りに預け金の事を厳しく掛合ましたうへ事實損失のあつた分は引棄てる様に申しましたら大分心が打解けました様です叔父と叔母とが俄かに私を邪見にしましたのは一時金に困つて人の煽動に乗つたのですから別に憎むことは御座いせん國支那の學者は無好人の三字は有

導者の言に非らずと申ししたこともある様なもので此方から誠實を盡せば世の中に悪人は少ないものですト話しながら凡の上に目を注げ「お春さん大層寫眞がありますネ登「先刻お隣の坊ちゃん遊びに来て寫眞挿みを傷めましたから直ちに遣らうと思つて寫眞を取り外して置いたので御座います大方古くて好いのは御座いせんヨ國些ト拜見ト云ひつゝ一枚の寫眞を取り「此西洋の女は頗る美人だ登「何とか云ひます佛蘭西の女役者ぢやさうです國成程さうらしい是れはグラッドストーン氏だア何様立派な顔ぢや歐羅巴の政治家は七八十になつて愈々氣象の盛んなのは實に感心デヤ日本人の五十にもなると老衰で仕舞ふのとは比べものにならぬお春さん一寸夫れをお見せ是は木質ですな如何も好い景色だなア登「遙か七湯が揃つて居りましたが何處へ行つたらうオヤ一つありました湯本の福住は一番綺麗ですネ此の間私が茲の座敷に居りまして貴君が彼方の二階でしたネ國左様左様此の半身形は誰れだらうア分つた○○だ近來は大層顔が肥満して立派になつたダガ此様な粗末な婦なら生さいでも善かりさうなものだ登「分利口な御人の様に聞いて居りますが何だか寫眞では重みがない様に見えますトと云ひ



(重 通 本 版 初)

つゝ一つの寫眞を取り此方は△△さんですなア
國左様です 鋭敏の氣象が顔に見えて居るが如
何も惡相だ民間の人もありさうなものだあつた
あつた□は立派好の人に似合はず頬の落ちて
居る所は貧相に見えるが何様一の政治家には違
ひないイヤ是れは●●ぢやな 随分長い顔サ正
直な人ではあるが度量の乏しいのが缺點で面
相にも氣品がない様チャイヤ別品の寫眞が澤山
ある是れは柳橋の斑八是れは新橋のお赤かネ

是れは芳町か知らん何處でか見たことのある
様な顔ぢやト云へばお春は笑ひ乍ら「イ、エ矢
張り新橋の藝妓で何とか云ひましたツけ國野さ
ん梅吉の寫眞がないのが残念ですネオホ、
國夫の藝妓は私が田舎に參つて居る時二三度
逢つたばかりで少しも怪しいことは御座いませ
ん貴女に疑られて誠に迷惑千萬な譯サ 春、オヤ
串戯に申したのでそのを眞面目に御なりな
さらないでも宜しいぢや御座いませんか 國お
春さん是れは何人ですか 春、なくなつた母です
國、成程何處か似て居らつしやる處がある様だ
とジロ／＼お春の顔を見る 春、さう顔を御覽な
さいますと穴が明きますヨと云ひ乍ら袖にて顔
を掩ふ國野は一枚の寫眞を手に採り「オヤ此の
裏には洋字がある『マイデヤア』(我が愛する人
の義) 貴女の御手の様ですなト開いてお春は違
てて手を出だし「夫れを御覽なさつてはいけま
せんヨ」國野は身を反らし「マアお見せなさい
ト裏を返せば一の少年の半身形なれば國野は目
たゝきもせず眺め居たりしが姑くありてお春
に向ひ「貴女は如何して此の寫眞を御所持です
か」お春は少し氣の毒さうな顔付にて「國野さ
ん夫れはいつかも御話申しました 先年私の
方へ養子に參る筈であつた人の寫眞で御座いま

すワト聞いて國野はハット驚き姑くお春の顔
を打眺めて居たりしが「お春さん夫れでは貴女
の御姓は藤井でなく富永でありますネそして御
親父さんの御名は正左衛門と云はいたしませ
んかト問はれてお春は不審顔、如何して亡父の
名前を御存じですが 國夫れを承知致さいで如
何しませう此の寫眞は僅か五年前私が淺草で
寫して御親父さんに差上げた品で御座いますト
聽いてお春はハット思ひ姑く詞も出でざりし
が稍あつて「夫人なら貴君が深谷さんで御座い
ますか 國如何にも以前は深谷梅次郎と申した
ことが後座います私の素性を貴女が御存じな
く又私は貴女が富永の御娘子とは知らず今日
まで斯様に御懇意にして居つたと云ふもマア不
審なことですト云へばお春は再び寫眞を手に
取りて打眺め又國野の顔をデット見詰め「さう
承はつて見ますれば是は貴君の寫眞に違ひは
御座いません實は私も井生村樓で初めて御目
に掛りました時に何處か此の寫眞に御格好の似
た處がある様に思ひましたが能く氣を付けて見
ますれば御顔付きが違つて居ります計りで無く
別の御姓名でもあるし昔と違ひ今では姓名を取
替へることの出来ぬ世の中ですから御同人であ
らうとは夢にも存じませなんだが四五年も大切

に仕舞ひ置きまして寫眞で昔の御名前を知る様になりまして矢張り盡せぬ御縁と思ひます其の内能く比べ合せて見ますれば寫眞の寫りが悪いせぬか御面相が大層御變りなされた様に見えますがドウ云ふ譯で御座います又貴君はナゼ御名前計りで無く御姓までも御改めなされたのですか何もかも夢の様で私には未だに不審が晴れませんと云ふにぞ國野も覺えず歎息し「委しことをお話し申さねば御分りにはならぬのも御尤も千萬です實は國野基が私の本姓であります六年程前に學問の修業に東京に出て都合が能くは歐洲へ留學に參り度と思ひ兩親に話しをして見ても幼年の時から叔父の内に養子に遣る内約があり先方の娘も年頃になることだから早く引越をして家を持たねばなるまい勝手に他處へ出ることは成らぬと云はれ何程お願い申しても御聽入れがないので今から妻帯をする様では事業をなす妨げになると思ひ錦を衣ねば再び古郷へ歸らぬと云ふ主意を書き置き竊かに國許を出立して東京へ來ましたが同郷の者に私の所在が知れると何かと面倒と思ひましたから假に深谷梅次郎と改名して身の落ち付を尋ねても思ふ様に行かず學資が盡きて當惑の處へ風としたことから貴女の御親父と御懇意になり食

客同様に御世話になつて居ます内に國許に兄がある事なれば此の内の養子になれ若しも洋行に志があるなら四五年の内には何とかして學資の工面も付くであらうとの御話しが出たものですから前後の考へもなく御相談に乘りましたが其の後國許には一人の御娘子があつて近々に東京になり直に私へ婚禮をさす御積りであることをチラと聞き込みましたから考へて見ますれば夫では私も國許の兩親へ申請が立たず其の上顔も氣象も知らぬ人を押し付けて家内にせよと云はるゝは迷惑千萬でありますから用事があると云ひ立てて北海道へ參り夫れから陸羽の間を遊歴して居る内に夫の名高い國事犯事件が起つて私にも嫌疑が掛る様子でありましたから越後の方に身を忍び慈と御親父へは文通もしませなんだが其の内に嫌疑事件で拘留になった朋友も大抵は放免になりましたから安心をして東京に出て早速神田の御宅を尋ねて見ると早や家主の二三人も代つて居るので愛宕下邊へ御引越になつたと云ふ計りで町名も分りませんから不本意ながら止だ折り／＼御引越先を捜して居りました私は其の前から國許の訛が協うたものですから舊の姓名に復しました其の上以前は此の寫眞の通りに随分太つて居りました

が越後に潛伏中胃弱の氣味合で大病を起し一時は骨と皮になつて仕舞ひましたので全快の後も昔の様に肉が付かず五六年前懇意にしたものでも途中で逢うた時には取違へる程でありますから貴女が寫眞を御覽になつた計りで私を御見覺えのなかつたのは無理では御座いせんソシテ御親父様は何時御死去なされたのですか查丁度貴君が函館とやらへ御出でになりました翌年で御座いましたが亡くなりますまで貴君のことを氣に掛けて居りました夫れから二年ばかりしますと母も大病になりました是非とも貴君の御歸りを待つ様にと私に遺言をしてト言ひ掛けてハラクと涙を顔し「とう／＼彼世の人になりましたから私は今日まで貴君のお行方を探して居りましたので御座います國野さんドウゾ私を不憫と思つて下さいませト説き立つれば國野もイト愁傷の體にて「承まはれば重ね重ねの御不幸で何とも申様の無いことです實は私も函根で御目に掛つた時に御名前と云ひ御音聲にも西國訛りがある様ですから御出立の跡で宿所附を調べて見ましたが長野縣平民藤井とあるので夫れでは富永の御息女ではなからうと思つたことでありますアレハどう云ふ譯でしたネ 春福住と叔母の本籍姓名を書いて

其の跡へ私の名ばかり附けて置きましたから貴君が長野縣のものとお召したのには御無理では御座いませんと話の夾へ隔ての障子を押開きて出て来るもののあるにぞ誰れならんと見れば此の屋の主人藤井権兵衛なれば二人ともハット驚きの権兵衛は靜かに座を占めて國野に向ひ「イヤ國野先生誠にお久し振でした五年前兩度ほど當永の宅で御目に掛つた事があるが頗と御様子が替つて御見違へ申した程だからお春の取違へて居たのは無理ではない實に先刻國野君が御出になつたと家内から承はつたから何様な御人であるか又どんな御話が出ることだらうと思つて次の間へ參つて立聞きをして居ましたら貴君が當永へ養子に來られる筈であつた深谷君であると云ふことだから誠に吃驚しました私もお春の爲めには義理ある叔父である上に當永の老人夫婦から呉れへ頼まれた事のあるに一時金錢の差支へより人の煽動に乗つてお春に色々な難儀を掛けたのは今更申譯のない次第だお春は何も角も知つて居りながら私夫婦へ對して悪い顔色もせぬと云ふは驚き入つた心底である此権兵衛は穴へでも入りたい様に思ひます當永老人の見立てた程あつて御年の若いに似合はず才氣と云ひ分別と云ひ世に比類なき國野

君と容貌も心立ても十人並に勝れたお春とは一對の梅櫻と申しても善からう此の上は権兵衛が懺悔の爲め媒妁を致すであらうから一日も早く御婚禮があつて當永の家を御嗣下されるれば無くなつた老人夫婦も嘸や地下で喜ぶでありませうト云ふを遮り「國イヤ御親切の御思召では御座います縁談のことは今四五年御見合せ下さる様に願ひます斯様に申せば何か私に外の考へでもあるとお疑も御座いませうが修業中である上に自分には財産も所持しませんから素封の家に成長なされたお春どのを娶つて一家を持つことは……權イヤ夫れは御心配に及びますまいお春いつかもお前が話したことがあるが御親父さんの御隠れになる前に御書き置きになつたものがあるではないかと云ふにお春は心もイソ／＼として身を起し「尋ツイ取紛れて御目に掛けることを忘れて居りましたト云ひつつ起つて用算筒の抽斗より桐の箱を取り出し蓋を開いて一通の手紙を國野に渡せば國野は手に探つて之れを視るの上に深谷梅次郎殿當永正左衛門とあり封押切つて之れを讀めば拙者僕老病ニテ最早餘命モ無之ト存候故一筆認メ置キ候貴君ヲ養子ニ致シ候儀口約ノミニテ未ダ表向ニ御國許へ掛合

等モ致サズ候内貴君函簡表へ參ラレ其後蹤跡相分ラズ定メテ國事犯嫌疑ニ因テ一時身ヲ隠サレ候事ト相考候拙者一女子アリ不氣量ニハ候得共幼年ヨリ少々讀書等モ致サセ置キ候故國許ヨリ寄セ貴君ニ御引合セ致シ若シ貴君ノ御見棄ナキニ於テハ往々巾櫛ニ侍セ度志願ニ候處拙者僕今日老病ニ差通り餘命之レナシト覺悟イタシ候拙者ハ貴君ノ大志アツテ國家ニ盡力スル爲メニ資財ノ必要アルヲ知ル因テ拙者所有ノ金子一萬圓地面三ヶ所貴君に譲與致シ候春女儀ハ貴君ノ妻ニ被致候共他ヨリ養子ヲ取り當永家ヲ相續致サセ候共拙者ニ於テ異存無之何卒貴君拙者ニ代リ春女ノ御世話成シ下サレ候様重々御依頼申候也

明治年月日 當永正左衛門

國野は幾度も繰り返して之を讀み眼に涙を流しながら「不肖な國野基を斯くまでに深く思召し下さるとは御禮の申様もありません此の御遺言もあることなれば御老人の御勤めに従ひませうが御老人の前でお春さんに篤と御相談を致して置かねばならぬことが御座います私も五

年前には次男の身でもあつて止だ洋行がしたい計りで富永家を嗣ぐことを御約束しました。が昨年國許の兄が病死しまして今では私が國野の相續人でありますソシテ私も少しは世の中に名を知られ及ばずながら社會改良の志を立て時々論壇に上つて我が邦養子法の道理に合はぬ事をも演説したものが遺産を譲り受けて他家を嗣いだことが世間へ聞えては後々出身の妨げともなりませう又私は一通りならず父母の高恩を受けた身でありますから一家を持つときになれば是非とも郷里より兩親をむかへ取つて孝養を盡したいと思ひます固よりお春さんも御承知の通り父母が家婦を下姉同様に取扱ふことは東洋古來の弊習で私も常に歎息して居りますから兩親が參つたとて別居異産の暮方をする積りですが出来る丈は兩親の安心をする様に致したいものと思ひます貴女は私と心を合はせて孝養を盡くして下さる事が出来ませうか此の二條さへ御承諾を下されるれば取敢ず手紙を出して兩親へも相談致し日を期して合登の禮を行ふで御座いませう 春只今の御話しは御尤も千萬のことですから私は一々承知を致しました就きましては私も貴君へ二つの御相談が御座います。が少し差し出ケ間しい口上の

様では御座います。が是まで私の見ます所で書生の内には氣象もあれば節操もあり天晴れ先々は世の中の爲めになる人と評判さるゝ程でも少し地位が出来たり妻子を持つ様になると自然に昔の氣象がなくなりまして止だ上手に世を渡ることを考へる人が幾らもある様に思はれます。何卒貴君は一家を御持になりました。是れまで通りに書生の積りで御勉強になりました。大事業を成されるが私の一つの御願で御座います。今一つは私の親は御承知の通りの氣質であります。今一つは自分は世の中の益に立つ様なことは出来ぬが國家の爲めに有用な事業と見たなら財産を遣ひ棄てても苦しくないと平生から申して居りました。私の譲り受けました遺産だけで此後一家の暮方をつけることが出来ませうから貴君は親より差上げました財産で國事に御奔走をなさるゝ資本に充て有志の人々を御結合なされますれば親の念願も通ります。貴君の御名譽にもならうかと思はれます。が貴君のお思召しは如何で御座いますか。ト聞いて國野はイトゞ感心したします。ト云へば權兵衛は傍より「イヤモウ愚昧の老人などは何も云ふ事はない。兄貴が生きて居て此様な話しを聞かれたなら何程喜ばれる

ことであらうに夫ればかりが残念だト頻りに手拭にて涙を拭ひながら「マア此様な御目出度ことは無いオイ誰れか居らぬか。お竹御酒を持つて来い。そして奥さんに一寸お出でなさいと云てお呉れ。お春マア此の寫眞を仕舞つては如何だ」夫れよりお春の叔母も出で来りて國野と近づきとなり四人にて酒宴を催し。國野は夜に入りて下宿屋に歸り。數日を経て巨細の事情を認めて國許の兩親に報知して其の恩人なる富永正左衛門の娘春女を娶るの承諾を得たれば番町邊にて相應なる家宅を見付けて引移り十一月の某日を以て愈よ婚禮を行ふことを約し其の心中の樂みは明治十八九年頃。に當り我國の人民が二十三年の來るを待つにも勝る程ならん嚴冬の積雪に埋れし寒梅も今や其の香を春風に洩して黄鳥の谷を出る時節に逢はんとす。此の二人の前途に就て尙ほ許多の談話あり。且つ此編に名前を出だしたる川岸武田を始め強盜俠客の身上に關する事柄は「花間堂」に於て之を書き綴るべし